岐阜協立大学論集 57 巻 1 号（2023 年）
The Journal of Gifu Kyoritsu University, Vol.57, No.1（2023）

我が国におけるフットサル競技の歴史的変遷

ー　ニュースポーツの発展経緯を探る　ー

原田理人（岐阜協立大学経営学部　教授）
榮　隆男（女子美術大学　名誉教授）

キーワード：フットサル，ミニサッカー，サロンフットボール，ニュースポーツ

Ⅰ．緒言

今日サッカーは，老若男女を問わず世界中のあらゆる地域でプレーされている。そのサッカーを統括する組織であるFIFA（国際サッカー連盟）[1)]の加盟国数は国連加盟国よりも多く，まさに世界最大のスポーツといえるが，欧州や南米など多くの国々において盛んにプレーされているスポーツは，サッカーだけではない。サッカーのあるところ，実は必ずフットサルがあるといっても過言ではない。

フットサルは基本的なプレースタイルこそほぼサッカーと同じであるが，11 人対 11 人でゲームを行うのではなく，GK を含んで 5 人対 5 人で行うものであり，サッカーと同様にプロリーグや世界選手権大会を有し，FIFA が統括する独立したスポーツ競技である。

フットサルは多くの人数で行うサッカーとは違い，5 人さえ集まれば試合が出来るなど，始めることが容易な人数であることや，ピッチサイズもサッカーの約 4 分の 1 から 8 分の 1 程度の大きさを用いるため，テニスコート程度のスペースさえあればどこでも安直に実施可能な「参加型」のスポーツといえる。

欧州や南米では，路地裏や広場，駐車場などで子供たちから大人までがフットサルに興じる姿を目にすることが多い。特に個人技に優れるといわれる南米においては，フットサル人口がサッカー人口を大きく上回っており，世界的に有名なサッカー選手の中にも，フットサル経験者が多いことに驚かされる。また，個人技術の高いサッカー選手であれば，何らかの形で必ずフットサルを体験しているといえるが，フットサルは単にサッカーのリードアップのためだけにあるのではない。このスポーツの優れている点はサッカーの技術的強化以外に，フットサルという独立したスポーツの存在意義とともに，「スピード，技術，戦術，チームワーク，運動能力等が養われ，人が持ちうる素質を開拓していく」というゲーム特性のほか，「楽しみ」や「コミュニティ形成」に適するという高い可能性をもったスポーツ種目である。

フットサルは，屋内外を問わず少人数でプレーし，ゲームを構成するフットボールの一形態であり，現在では世界規模で展開されるスポーツ（競技）の一つとなっている。近年，地域におけるスポーツ振興やユビキタス溢れる新たなスポーツ・レジャーの観点からフットサルが注目されるようになってきたが，一方で，フットサルの歴史的変遷についての研究はまだまだ少なく，その成り立ちや全国的な普及の過程，もしくは今後の展望について，多方面より信憑性の高い研究が求められている。

本研究では，フットサルというニュースポーツについての歴史的変遷を精緻に調査し，我が国に紹介されたきっかけはどのようなものであったか，もしくは全国的な普及の過程，今後の展望などについて紐解いていくことにより，ニュースポーツでありながらも民間施設のビジネスモデルが展開され，全国規模の組織と全日本選手権大会からトップリーグへ展開していく発展プロセスを明らかにすることは，スポーツ

の発展過程についての有効な事例研究として多くの知見を与えてくれるものである。

フットサルの誕生は1936年にウルグアイにおいて，「インドアフットボール」としてYMCA[2)]にて独自のルールが作成され，YMCAを中心として世界へ普及し始めたことを受けて，1956年に札幌YMCAの海老澤が我が国へ紹介したことに端緒を開いているといわれている。そこから様々な局面を経て，今日では公益財団法人日本サッカー協会（以降JFA）による全日本選手権大会が開催され，2023年においては28回を数えるまでになった。また，我が国における最も長く開催されているのは，一般財団法人日本フットサル連盟主催の全国選抜フットサル大会であり，2023年次で38回を迎えるまでになっているほか，近年では男子のみならず，女子まで広がり，全国レベルの大会も充実化をみせている。

世界規模の大会では，各大陸別選手権大会が開催され，アジアサッカー連盟（以降AFC）では，1999年に第1回アジア選手権大会が行われ，さらにクラブ選手権大会なども開催されている。さらにFIFAによるワールドカップも開催されており，国際サッカー連盟（以降FIFA）の加盟国はサッカーのみならず，フットサルも行なっているといっても過言ではない。

我が国におけるフットサルの歴史を顧みると1950年代から1979年には国内に紹介され活動が始まる創成期，1980年から1995年代の世界の「インドアフットボール」や「FIFUSAのサロンフットボール」から「FIFAのフットサル」に切り替わるまでの黎明期，1996年から2000年代には組織化が進み，全国大会などが始まる成長期，2000年から2020年までには，全国規模の組織づくりとカテゴリー毎の全国大会，トップリーグなどが生まれ，日本代表が国際大会で実績を上げ始めた充実期，などと区分することで整理を進めるべきであると考えるが，成長期から現在までの状況については記録が残されているものの，創成期の顛末などは正確な記録が残されておらず，様々な方面にて独自の解説が散見される。

そこで本論文では，多くのスポーツが「ニュースポーツ」として誕生しながらも，普及・発展を遂げることなく限定された活動に終始しているケースが多い中で，全国展開を果たし，メジャースポーツと同様の発展をみせているフットサル競技の普及発展について，その創成期から黎明期までの約50年間にわたる歴史を紐解き，その歴史的変遷を考察する。

本研究の目的は，我が国において急速な普及・発展を遂げてきたフットサルの歴史的変遷を通じて，スポーツの発展要素を明らかにし，普及・発展の示唆を得ることにある。また，本論文の成果は，フットサル研究の発展やフットサルというスポーツを通し，スポーツ環境の整備・改善に貢献することが期待される。

研究の範囲と方法については，フットサルの歴史的変遷を取り上げ，現存する実際に創世記に携わった方々からの直接聞取調査，大会資料などを収集するとともに，歴史的な文献や論文，資料などを総合的に調査し，多角的な視点から研究を進めていくものである。

Ⅱ．フットサルの起源と発展

2.1 インドアサッカーの起源と普及

FUTSALの起源は，1930年代にアルゼンチンの「ベルグラーノ・アスレチック・クラブ」で行われた屋内サッカーに遡るといわれるが，第1回サッカーワールドカップがウルグアイで開催された際にウルグアイでサッカーが一大ブームとなり，ストリートサッカーが盛んに行われるようになったことから，ミニサッカーが注目を集め，後にYMCAが室内サッカーを発展させたことにより，「FUTBAL DE SALON（現FUTSAL）」が誕生したとされている。このYMCAは「Young Men's Christian Association」の略であり，キリスト教系青年団体として，19世紀後半にアメリカで設立された「キリスト教青年会」である。このYMCAは青少年の健全育成を目指し，健康増進やスポーツの普及を目的として活動している。YMCAは，1936年当時，屋内

サッカーと呼ばれるゲームを開発し，その後，世界中のYMCAでプレーされるようになった。室内サッカーは，1930年に第１回サッカーワールドカップが開催され，一大ブームが巻き起こったのと時期を同じくして，ウルグアイのモンテビデオで南米YMCAの理事長をしていたファン・カルロス・セリアーニが，YMCAで楽しくスポーツを実施させるために室内サッカーの仕様を考案したことが端緒となっている。

ファン・カルロス・セリアーニの目標は，ウルグアイが1930年のワールドカップと1924年と1928年の夏季オリンピックで金メダルを獲得し，国民がサッカーに強く惹かれたことに伴い，屋内でも屋外でも実施できるサッカーに似たチームスポーツを作成することであった。

YMCAはすぐに南アメリカ全体にこのスポーツを拡大している。冬でも，どこでも，どのような気象条件であっても，誰もが問題なくプレーすることが可能であり，このスポーツによって，プレーヤーは一年中健康を維持することが可能になるのである。このスポーツにおける完成度の高さと将来性を感じとり，ブラジル人のジョアン・ロトゥフォは，このスポーツを自国に持ち帰り，教育との親和性の高さや教育ニーズに適応させることの有効性を確信した。

当初，まだ世界的にルールが統一されていなかったため，ブラジルのサンパウロのYMCAにおいて体育指導者であったハビブ・マフスとルイス・ゴンザガ・デ・オリベイラ・フェルナンデスは，1939年に「室内サッカー ルールブック」を作成したことが基本となり，その後間もなくブラジル国内でトーナメントが開催されたのをきっかけとして南アメリカのメディアにも関心も集まることとなった。

このように当初YMCAを中心として開発されたルールは，ブラジルへ渡り，ブラジルのサッカー選手たちが技術向上のために練習するようになったことがきっかけとなり，それ以降「FÚTEBOL DE SALÓN」はブラジルや南米で発展し，後に世界中へ広まっていくことになった。この「FÚTEBOL DE SALÓN」という名称は長きに渡り南米の一般的な名称として定着していくことになる。また，YMCAは「室内サッカー（FÚTEBOL DE SALÓN)」を普及させるために，各地でトーナメントやリーグ戦を開催し，室内サッカーを楽しむ人々のコミュニティを形成することに貢献しただけではなく，後の「FÚTEBOL DE SALÓN」の発展に大きく貢献したことから，FUTSALの歴史において重要な役割を果たしたといえる。特に，ゲームの急速な普及に情熱を注いだのはジャーナリストのホセ・アントニオ・イングレスであり，スポーツを定義するために「FÚTEBOL DE SALÓN」という名前を作り出した人物として知られている。

このように室内サッカー（FUTSAL）の創成エピソードは明らかになってはいるが，YMCAでの活動開始やブラジルへ渡った詳細な年代などは，諸説あり明らかなエビデンスは存在しない。また，1937年には我が国において「第１回関東６人制蹴球選手権大会」が関東蹴球協会の主催で開催されたという記録が残されているが，この時の６人制のサッカーは人数の少ないサッカーの大会であり，FUTSALの活動記録とは流れを異にするものといえる。

2.2 フットサルの国際的な普及

YMCAが室内サッカーの普及を開始し，その文化がウルグアイからブラジルへ伝承され，ブラジルで1939年に「室内サッカー ルールブック」を作成されたことに続き，1965年には，ウルグアイ，パラグアイ，ペルー，アルゼンチン，ブラジルからなる「南米フットサル連盟（CSFS／ウルグアイ本部)」が結成された。引き続き，1971年当時のFútbol de Salón連盟(CSFS ／後のCBFS)とブラジルサッカー協会(以降CBD)の主導により，ブラジル，アルゼンチン，ボリビア，パラグアイ，ペルー，ポルトガル，ウルグアイなどの全国協会（連盟）の代表者が出席し，サンパウロに世界初のフットサル国際連盟となる「FIFUSA（Federación Internacional de Fútbol de Salón 1971年−1989年)」が設立された。同時に，ジョアン・アベランジェが連盟の会長職に選出されたため，ルイス・ゴンザーガ・デ・オリベイラが事務総長に任命され，ポルトガ

ルを除き他の各国参加協会（連盟）に対しての指導的役割を果たしている。

その後，ジョアン・アベランジェがブラジルサッカー協会（CBD）の業務や，1974 年に就任する FIFA 会長選挙などのキャンペーンで忙殺されたことによって，1974 年までは実質的に FIFUSA はルイス・ゴンザーガ・デ・オリベイラが率いていた。その段階まで，FIFA は南米で根付き始めていたこのスポーツにはまだ注目していなかったが，1975 年，ワルディル・ノゲイラ・カルドーゾが FIFUSA の会長に選出され，パンアメリカン（環太平洋）選手権大会などの大規模のフットサルイベントの創設と，このスポーツの他の国の現実への拡大に取り組んだことが記録されている。そして 1980 年，新しい FIFUSA の会長選挙において，当時のブラジルにおけるプロサッカーのトップクラブの一つであるパルメイラスのトップマネージャーであったジャヌアリオ・ダレッシオネトが会長に就任した。その後 FIFUSA はワールドカップや FUTSAL をヨーロッパに持ち込むために積極的に働きかけ，1980 年代に入ると FIFUSA は急速に成長し，競技人口や国際大会の数を増加させることになる。

1982 年には，初めての FIFUSA[3] サロンフットボール（Fútbol de Salón）世界選手権がブラジルで開催され，地元ブラジルが初優勝を果たした。この時の競技名称は「Fútbol de Salón」であったが， 1985 年には第２回 FIFUSA ワールドカップがスペインで開催され，ブラジルが連覇し，スペインが２位に入った際に競技名称を「FUT・SAL」と定めたため，この時から南米由来の室内サッカーは「FUTSAL」となった。

2.3 国際組織の対立と FIFA によるフットサルの統括

この 1985 年代から，一般の人々とメディア（TV は大会をライブ放映した）は大きな反応をみせ，すでにブラジル国内では大変人気の高いアリーナスポーツの一つとなっていた。また，FIFUSA の初代会長であったジョアン・アヴランジェが FIFA の会長となったことで，1986 年の初めから FIFUSA の活動を FIFA へ組み込むことが模索され，1990 年代に入り，FIFA（国際サッカー連盟）がフットサル競技の統括を決定した。

1990 年代，FIFA は南米諸国でプレーされていた「Fútbol de Salón」とは異なる独自のルール形成[4] を試み，FUTSAL の普及・発展を検討していたが，1989 年に行われた第１回の FUTSAL ワールドカップの開催時にリオデジャネイロで行われた会議でも FIFUSA との合意形成に及ばず，組織統合の調整は叶わなかったこともあり，1992 年には，FIFUSA は自身を FIFA から独立した国際競技連盟と宣言し，FIFA との関係を断絶することとなった。また，1994 年に競技名称が FIFA によって「FUTSAL」に統一された。

2000 年にもグアテマラで行われる予定であった第４回 FUTSAL ワールドカップに向けて状況の修復を試みたが，これも叶わず，FIFA は独自のルールによって第４回 FUTSAL ワールドカップを開催している。

このように長期に渡り FIFUSA と FIFA の関係に問題が生じていたが，実は FIFUSA の役員の多くは FIFA へ転籍し，FUTSAL の基幹事業を担っていた事実もあるため，この一連の確執は一部の幹部役員のこだわりが招いた問題であることも指摘されている。これは我が国においても同様であり，後に禍根を残すことにつながっている。

1985 年の時点で FIFA からは，世界の FA に対し，今後 FIFUSA の大会へ参加する FIFA の登録選手には，何らかの罰則がある旨の通達が出されたが，日本は，1982 年の FIFUSA 世界選手権大会に神奈川県在住であった学生主体のチームが有志を募って参加している。また，第２回の世界選手権大会には，我が国初の「全国サロンフットボール大会（現全国選抜フットサル大会）」が静岡県沼津市で開催され，第２回世界選手権大会へ出場するための代表選手が選考されることになった。後に強化合宿や国際試合をこなすなど，充実した代表選考が行われたが，これが我が国における初のフットサル日本代表の編成であった。この時の日本における競技名は「サロンフットボール」であり，「Fútbol de Salón」という当時の正式な国際名称の直訳名称を用いていた。

つまり，このFIFUSAによる第２回世界選手権大会より「FUT・SAL」という名称となったため，サロンフットボールの日本代表が「FUT・SAL」の世界選手権大会へ出場することになったわけであり，ルールの変化なども現地へ赴いてから確認するという状況であったことなどをみても，目まぐるしく変化するフットサルを取り巻く環境が世界的な混乱を招いていた時期であったといえる。

そして1997年にFIFUSAは，自身をFutsal Association International（FAI）と改名し，独自の事業展開を進めるに至っている。Futsal Association International（FAI）はFIFAとフットサルを巡って対立構造を深めたが， FIFAはFAIを認めることなく，2008年にFIFAが統括する室内サッカー競技を「FUTSAL（フットサル）」とし，これを正式な名称として定めた。

FIFUSAは，FIFAが「５人制室内フットボール」というスポーツに無関心であった当初の時期を経て，FIFA自身がこれまでのFIFUSAの「５人制室内フットボール」に対抗するだけでなく，そのFIFUSAバージョンに取って代わることを意図することによって，同連盟への活動に制約を与えるようになっている。

アルゼンチンでは，FIFAとアルゼンチンサッカー協会（AFA／Asociación del Fútbol Argentino）が共同で最初の「５人制室内フットボール選手権」を開催したが，その際，アルゼンチンサッカー協会（AFA）がクラブにこの競技のチーム登録を求めることで，この競技は国内に定着することとなった。翌年，アルゼンチン連盟による競技規則が変更され，強制的な登録は課されなかったが，FIFUSAに登録されているアルゼンチンフットサル連盟（CAFS／Confederación Argentina de Fútbol de Salón）への加盟が禁じられたことにより，アルゼンチンの主要クラブは，1975 年に設立されたアルゼンチンフットサル連盟（CAFS）から離脱することとなった。しかし，アルゼンチンフットサル連盟（CAFS）は，1986年にアルゼンチンサッカー協会（AFA）とFIFAを相手取った訴訟において，アルゼンチンスポーツ連盟（C.A.D.）から，５人制フットボールサッカー（Fútbol de Salón）の運営を統括する唯一の組織と定義された「決議13号」を受け取っている。

この時，ブラジルなどは積極的にFIFAへの組織的な方針転換に賛同し，第１回FIFAフットサル世界選手権への遠征に備えたが，第３回FIFUSA世界選手権大会にて世界チャンピオンに輝いたパラグアイは，このFIFUSA吸収に反対するキャンペーンを展開した。このようにFIFUSAは，組織的なFIFAの攻勢により，1988年にFIFAの５人制サッカーを統括・監理することの決定を契機として1990年にその役割を終えることになったが， FIFUSAに残された有志で引き続き組織を維持しようと試み，引き続き国際大会などを開催していたが，1990年９月に，パラグアイ，コロンビア，メキシコ，ウルグアイ，アルゼンチン，ベネズエラ，コスタリカ，プエルトリコ，ボリビアが加盟し，エクアドル，オランダ領アンティル，アルバ，カナダが加わり，パンアメリカンフットサル連盟（PANAFUTSAL）がFIFUSAに代わり，コロンビアの首都ボゴタに設立された。

2000年のフットサル世界選手権大会時にグアテマラで開催されたPANAFUTSALとFIFAのメンバーによる会議では，フットサルをめぐる組織間紛争の終結が期待されたが，これまで南米全体に浸透し，多くの人々を魅了してきた５人制フットボールサッカー（Fútbol de Salón）の継続を目指したPANAFUTSALと，独自のフットサルを主張するFIFAの分裂から10年後に交渉の会議が行われたことをみても，その調整の難しさが窺える。この「グアテマラ2000」と呼ばれる議定書の調印は，FIFAの強い主張により物別れに終わっている。そこでPANAFUTSALは，1960年代から南米を中心に世界中に広まった５人制フットボール（Fútbol de Salón）というスポーツを守ることを決意するが，2002年の組織内クーデターにより分割され，世界的な性格を持つ新しい団体が設立された。

2002年12月，アスンシオンで「Asociación Mundial de Futsal」が設立され，現在31の国内連盟と３つの大陸の組織が加盟している。

このように，2000 年にFIFA へ加盟するべく参加意向書を提出したが，すでに各大陸連盟で「フットサル委員会」が組織され，大会が開催されるなどの普及が急速に進められたことなどを背景に，この意向も成就することはなかった。そしてパンアメリカンフットサル連盟（PANAFUTSAL）」のメンバーは，他の大陸における各国に残されたFIFUSA 加盟組織が再び国際大会へ参加することを可能にするため，新たに「世界フットサル協会（AMF／Asociación Mundial de Fútbol de Salón）」を設立した。

現在「世界フットサル協会（AMF／Asociación Mundial de Fútbol de Salón）」は，女子の大会やU-20 に特化して細々と活動を継続している。1990 年に FIFUSA はその役割を終えることとなったが，歴史的には現在までのフットサル競技のルールや国際大会の形式，普及・発展に多大な影響を与えた重要な団体の一つとして位置づけられる。

図表１：FUTSAL 世界年表　（概略／～1997 年）

年　代	世界の変遷		
1863 年	英国協会にて「協会式フットボール規則」が定まる。		
1903 年	英国にてFAが創設される。		
1930 年	ウルグアイにて第1回FIFA WORLD CUP開催され、地元ウルグアイが優勝する。		
1936 年	W杯優勝の影響でサッカーブームが興る。		
1936 年	ウルグアイにてインドアフットボールとして独立ルールが試案され、YMCAを中心として普及する。		
1939 年	ブラジルのサンパウロのYMCA内でハビブ・マフスとルイス・ゴンザガ・デ・オリベイラ・フェルナンデスが「室内サッカー ルールブック」を作成。		
1940 年	市民スポーツとして南米各国にFUTSAL文化が広がった。ブラジルにて全国区のルールが統合される。		
1962 年	FIFUSA「国際サロンフットボール連盟」が結成される。		
1965 年	第1回南米選手権大会がパラグアイで開催され、パラグアイが優勝した。		
1970 年	FIFUSA「国際サロンフットボール連盟」に世界32カ国が参加した。		
1977 年	第1回ベネルックスカップ（ベルギー、オランダチャンピオン対抗戦／各カテゴリー）以降毎年開催される。		
1980 年	パンアメリカンカップがメキシコで開催され、ブラジルが優勝した。		
1982 年	FIFUSA 第1回サロンフットボール世界選手権大会開催される。	※ブラジルが優勝	※日本は有志参加
1982 年	第1回　4ヶ国対抗ネーションズカップがオランダで開催されオランダが優勝した。		
1983 年	第2回　フォーネーションズカップがローマで開催されイタリアが優勝した。		
1984 年	ハワイで4カ国対抗大会が計画されるが中止となった。		
1984 年	第1回　世界大学選手権大会がブラジルで行われブラジルが優勝した。		
1984 年	パンアメリカンカップがブラジルのサンパウロで開催され、ブラジルが優勝した。		
1985 年	インターナショナルチャンピオンクラブトーナメントが始まる。		
1985 年	FIFUSA 第2回サロンフットボール世界選手権大会がスペインで開催される。	※ブラジルが優勝	※日本代表参加
1986 年	FIFAトーナメントが11月にハンガリーで開催された。8ヶ国参加し、オランダが優勝した。		
1987 年	FIFAは「5人制サッカー（室内サッカー）」専門委員会を設置した。		
1987 年	パシフィックカップ環太平洋選手権大会が豪州で開催される。優勝はメキシコ。		※日本代表参加
1988 年	FIFUSA第3回サロンフットボール世界選手権大会が豪州で開催される。	※パラグアイが優勝	※日本代表参加
1988 年	FIFAは専門委員会によって「5人制サッカー（室内サッカー）競技規則」を作成した。		
1989 年	FIFA第1回ファイブ・ア・サイド・フットボール世界選手権大会がオランダで開催され、ブラジルが優勝した。		
1990 年	FIFAが「室内（5人制）サッカー委員会」を正式の委員会として設置した。		
1990 年	第2回　世界大学選手権大会がイタリアでおこなわれイタリアが優勝した。		
1991 年	パンアメリカンカップがブラジルのポア・ビスタで開催され、ブラジルが優勝した。		
1992 年	第9回　4ヶ国対抗ネーションズカップがオランダで開催されオランダが優勝した。		
1992 年	第3回　世界大学選手権大会がスペインでおこなわれスペインが優勝した。		
1992 年	FIFAが世界のミニサッカーを統一し、完全にルール、機構の統一を図り、各国連盟が各国FAに合流。 名称に「FUTSAL」を使用。		
1992 年	FIFA第2回 FUTSAL世界選手権大会が香港にて開催され、ブラジルが優勝した。イランが3位に。		
1992 年	FIFA　FUTSAL競技規則改定。		
1994 年	FIFAが正式に名称を「FUTSAL」に統一。		
1994 年	FIFA　1994FUTSAL競技規則改定。		
1994 年	国際イベント、「第1回　Mundialito」がイタリアにて6ヶ国の参加で開催され、イタリアが優勝。		※日本選抜が参加
1995 年	第1回 Copa Americaがブラジルで開催されブラジルが優勝した。		
1995 年	FIFA 1995FUTSAL競技規則をさらに改定。		
1995 年	FIFA第3回 FUTSAL世界選手権大会アジア予選が上海にて開催される。		※日本は予選敗退
1996 年	第1回　北米フットサル選手権大会がグアテマラで開催されアメリカが優勝した。		
1996 年	FIFA第3回 FUTSAL世界選手権大会がスペインにて開催され、ブラジルが優勝した。		
1996 年	UEFA　第1回FUTSALヨーロッパ選手権大会がスペインで開催されスペインが優勝した。		
1997 年	豪州にて4カ国対抗ネーションズカップ開催		※日本は4位（全敗）
1997 年	第1回コパ・リオがブラジルのリオデジャネイロで開催され、ブラジルが優勝した。		
1997 年	シンガポールにて第1回タイガー5FUTSALチャンピオンシップが開催されスペインが優勝した。		
1999 年	AFC主催による第1回アジアフットサル選手権大会が開催される。	／香港	※日本4位
1999 年	シンガポールにて第2回タイガー5FUTSALチャンピオンシップが開催され、ブラジルが優勝した。		

2000 年	南米チャンピオンズクラブトーナメントが始まる。		
2000 年	FIFA 2000FUTSAL競技規則改定。		
2000 年	第1回 アフリカフットサル選手権大会がエジプトで開催されエジプトが優勝した。		
2000 年	AFC主催による第2回アジアフットサル選手権大会兼FIFA第3回FUTSAL世界選手権大会アジア予選が開催。		※日本4位 ／タイ
2000 年	FIFA第4回 FUTSAL世界選手権大会がグアテマラにて開催され、スペインが優勝した。		
2001 年	ASEAN FUTSAL 大会がマレーシアで開催されタイが優勝した。		
2001 年	AFC主催による第3回アジアフットサル選手権大会が開催される。	／イラン	※日本4位
2001 年	シンガポールにて第3回タイガー5FUTSALチャンピオンシップが開催され、スペインが優勝した。		※日本6位
2002 年	国際イベント、「2002 Mundialito」がイタリアにて8ヶ国の参加で開催され、ブラジルが優勝。		
2002 年	国際イベント、「REAL MADRID 100周年記念大会」が開催され、スペインが優勝、ブラジル2位		
2002 年	AFC主催による第4回アジアフットサル選手権大会が開催される。	／インドネシア	※日本2位
2002 年	エジプトにて第1回ピラミッドカップが開催され、ブラジルが優勝した。		
2003 年	ヨーロッパ選手権大会がイタリアで開催され地元イタリアが優勝した。		
2003 年	第4回「Tiger5s」が「World5s」に名称変更し、マレーシアにて開催される。アルゼンチン優勝。		※日本ﾌﾟﾚｰﾄ優勝
2003 年	AFC主催による第5回アジアフットサル選手権大会が開催される。	／イラン	※日本2位
2003 年	エジプトにて第2回ピラミッドカップが開催され、ウクライナが優勝した。		※日本5位
2003 年	タイにて4ヶ国対抗ネーションズカップが開催され、ブラジルが優勝した。		※日本2位
2004 年	AFC主催による第6回アジアフットサル選手権大会が開催される。	／マカオ	※日本2位
2004 年	FIFA第5回 FUTSAL世界選手権大会が台湾にて開催され、スペインが優勝した。		

2.4 南米と欧州を中心に広がるフットサル文化

これまで，FUTSAL は，1930 年代にウルグアイで考案され，その後，南米で広まったことは述べた。その後 1950 年代には，南米の国際大会が開催されるようになり，このスポーツは南米を基本に普及が進むことになる。そして 1960 年代には，FUTSAL は欧州にも広がりをみせ，ラテン語系のスペインやポルトガルなどの国で盛んにプレーされるようになった。さらに 1970 年代には，国際的な FUTSAL トーナメントが開催されるようになったため，FIFA（国際サッカー連盟）もこのスポーツを認めるようになった。

1990 年代には，FUTSAL が世界的な競技スポーツとして認知され，多くの国でプレーされるようになった。欧州では，スペインやポルトガルなどが FUTSAL の強豪国として知られている。

欧州では，FUTSAL は単なるサッカーのミニ版としてではなく，サッカーと同様に新たな競技の一つとして認知され，多くの人々に親しまれているだけでなく，欧州各国でトップリーグやトーナメントが開催され，プロリーグも存在している。

2.4.1 南米のフットサル

南米はフットサルの強豪国が多く，世界的なフットサルの舞台でもその強さを発揮している。特に，ブラジル，アルゼンチン，パラグアイ，ウルグアイ，コロンビアなどの国々が，南米におけるフットサルのトップチームを抱えている。中でもブラジルはフットサルが最も盛んな国の一つであり，多くの名だたる選手を輩出している。ブラジルのナショナルチーム（代表チーム）は，2022 年までの FIFA フットサルワールドカップでは，5 度の優勝を果たしており，チームの強さのみならず，個人技術の高さや競技能力の高さは世界でもトップクラスであり，各国のトップリーグへ選手を送り込んでいる。

また，アルゼンチンやパラグアイもフットサルの強豪国として知られ，FIFA フットサルワールドカップでもそれぞれ優勝経験を有している。いずれもサッカーのワールドカップでは必ずといって良いほど優勝候補の一角に位置付けられている。ウルグアイやコロンビアもフットサルの強豪国として知られており，南米のフットサル界を支えている。このように南米のフットサルは，高度なテクニックとチーム戦術を持ち合わせるなど，その魅力や実力は世界中から高く評価されている。

2.4.2 欧州のフットサル

欧州も，南米に次ぐフットサルの強豪地域である。特に，スペイン，ポルトガル，イタリア，ロシア，ウクライナ，チェコなどがフットサルのトップチームを抱えている。ワールドカップでは常に上位へ進出する強豪国が揃う。しかし，まだ室内サッカーの独自の文化が根強く残っているため，サッカーではワールドカップ常連国となっている国であってもなかなかフットサルへの積極的な取り組みが進んでいなかった。

早期にフットサル発展の流れに沿って実力を高めてきた「ラテン系」の国は，実力や実績共に積み上げてきている。特にスペインは，近年のフットサル界において最も強い国の一つであり，FIFA フットサルワールドカップで過去に 2 度の優勝を果たしている。また，UEFA フットサル選手権でも過去 7 度の優勝を誇っており，その技術と戦術の高さは世界的に知られている。

ポルトガルも，フットサルの強豪国の一つであり，FIFA フットサルワールドカップでは過去 2 度の準優勝を経験しています。イタリアやロシアもフットサルの強豪国として知られており，欧州サッカー連盟（以降 UEFA）フットサル選手権でそれぞれ 2 回の優勝経験を有している。

2.4.3 各国の「ミニサッカー」「インドアサッカー」文化

「ミニサッカー」や「インドアサッカー」は，普通のサッカーボールや弾むボールを使って，アイスホッケーのように壁面のはねかえりを利用するなど欧州，南米共に独自の特徴をもっていたものから，南米の「サロンフットボール（Fútbol de Salón）」のように壁を仕様しないものまで，まさに「ミニサッカー」や「インドアサッカー」は世界中で独自の文化が築かれつつあった。

① スペイン（フットボール・サラ ／ Futebol de Sala）

「Futebol de Sala」とはスペインで行なわれている「サロンフットボール」を指すものである。スペインで「フットボール・サラ（サロンフットボール）」と呼ばれる室内サッカーは，若干フットサルとはルールが異なり，現在においても国内リーグなどでは独自のルールを用いている。「Sala」は 11 人制サッカーよりも競技人口が多く，子供から大人まで 100 万人以上のプレーヤーが存在するといわれている。また 1～4 部に分けられたプロリーグが開催されているだけではなく，2000 年，2004 年のフットサル世界選手権大会では優勝を遂げるなど，今やスペインはブラジルと並び，世界の「フットサル強国」として知られている。

② ドイツ（ハーレン・フッスバル ／ Hallen fußball）

1952 年，理由は明らかではないが，西ドイツサッカー協会は一度室内サッカーを禁止したことがある。それは 1970 年に解除され，現時点では様々なカテゴリーにおけるルールが整備されている。ドイツでは 11 人制サッカーのプロリーグであるブンデスリーガのプレーヤーたちが，シーズンオフの１月にイベント的に始めてから，インドアサッカーが非常にポピュラーになった。

ドイツの冬は寒く，屋外ではとてもプレーできず，観客も楽しんで観ることができないため，ハーレン・フッスバル（Hallen Fussball）と呼ばれる屋内サッカーを，ブンデスリーガのオフシーズンでやり始めたといわれている。組み立て式の壁を立て，会場の大きさに合わせて１チームの人数を決め，１日に３～４チーム出場して何試合もプレーするというものであった。スタイルは英国式の「インドアサッカー」である。現役はもちろんのこと，引退したばかりのトッププロのプレーも間近に観ることができるため，多くのサッカーファンを集めるイベントになっている。この文化が根強いため，ドイツはサッカー強国でありながら「FUTSAL」への着手が遅れている。近年ようやく代表チームが編成され，公の大会へ出場するようになっている。

③　イタリア（カルチェット　／　Calcio Cinquet）

イタリアには「カルチョ・チンクエット（略してカルチェット／5人制サッカー）」と呼ばれるフットサルがある。1980年代に入ってから本格的に開始されたようであるが，その発展のスピードは速く，今やイタリアは世界のトップクラスのレベルに達している。サッカーのようにセリエA，B，Cとクラス分けされたプロリーグが存在しており，その下にアマチュアリーグが控えている。2002年の欧州選手権大会を制し，2004年の世界選手権大会では悲願の決勝進出を果たした。

④　　オランダ（ザール　／　Zaal）

「ザール」と呼ばれているオランダのインドアサッカーでは，独自のリーグがあるほど盛んである。欧州では歴史も古く，世界選手権大会のテストとして行われた第一回世界トーナメントでは優勝し，FIFAが開催した第一回世界選手権大会では見事に決勝戦まで進み，優勝したブラジルと戦い２対１と惜敗している。常に欧州では上位に位置付けられる他，優秀な指導者も存在している。

⑤　アメリカ（インドアサッカー　／　Major Indoor Soccer League）

アメリカではプロ化された「アメリカン・インドア・サッカー」（MISL=メジャー・インドア・サッカー・リーグ）が，すでに20年を超え，その人気も定着している。この競技は英国や豪州でも行なわれ，アイスホッケー場で壁を用いて，タッチラインのない「インドアサッカー」の流れである。実績も第一回世界選手権大会では堂々の３位を確保し，アメリカのフットサルが世界のトップクラスであることを証明してみせた。国内でもYMCAなどによって数多くのスクールが行われている。

⑥　ブラジル（フチボル・デ・サロン　／　Fútbol de Salón）

ブラジルでは長い間「フチボル・デ・サロン」（Fútbol de Salón）と呼ばれ，「サロンフットボール」が中心に行なわれてきた。これは「国際サロンフットボール連盟（FIFUSA）」を中心に活動されてきたものであるが，「ブラジルサロンフットボール連盟（CBSF）」はFIFAの参入に伴い，1990年代の中頃に「国際サロンフットボール連盟」から脱退し，FIFAの傘下である「ブラジルサッカー協会（CBF）」の下部組織として活動を始めた。当時の「国際サロンフットボール連盟（FIFUSA）」はブラジルに本拠地を置いていたが，組織役員の大半がFIFAのフットサル担当役員として移籍するなど，「BRASIL フットサル」はFIFUSAからFIFAへ移行された。しかし「Federación Internacional de Fútbol de Salón（FIFUSA）」は後に分裂し「Asociación Mundial de Futsal（AMF）」として依然活動は続いており，少数ながら組織を維持している。また中南米の国々では，どこもブラジルと同様の「フチボル・デ・サロン」が国民的スポーツとして行われてきており，メキシコ，コスタリカ，ウルグアイ，パラグアイ，アルゼンチン，コロンビア，ベネズエラ，ペルー，チリなどの国々では特に活発に行なわれ，多くの選手を欧州に送り出している。ブラジルは世界選手権大会を５度にわたって制し，現在フットサルにおける世界最強国であることは自他ともに認めるところである。

⑦　イギリス（ファイブ・ア・サイド　／　Five a side）

屋内ミニサッカーの原型ともいわれ，FIFAのフットサルのモデルとなった。フットサルのルール統一に伴い，その名称は「フットサル」に決定するまで「ファイブ・ア・サイド」が使用されていました。

毎年11月末に全英大会が開催されている。ウェンブリースタジアムの水泳プールで水を抜いたコートで試合が行なわれており，壁のリバウンドを生かしたスピーディなゲームとなっている。

ボールがラインアウトとならないため，ゲームが止まることも少なく，プレーヤーは著しく体力を消耗するゲームである。ボールは硬式テニスボールをそのまま大きくしたような起毛をまとったものを使用している。

このほか，ロシアなどでも古くからアイスホッケーコートをそのまま利用し，ゴールの裏側もプレー領域とした「インドアサッカー」が行なわれてきたほか，アイスホッケーの戦術[5)]がロシアやウクライナなどのフットサルの戦術に活かされ，フットサル強国となった素地が伺える。

このように「ミニサッカー」や「インドアサッカー」が各国で展開されており，ルールや仕様は異なるものの着実に独自の文化として育まれてきている。こうした独自の文化が醸成されている中でも，世界的なインドアスポーツとして，FUTSAL という統一ルールのもとで世界選手権大会（ワールドカップ）が開催されている。また，今後は女子ワールドカップも開催される準備が進められている。

2.5 FIFA フットサルワールドカップの開催

国際インドアサッカールールの統一化という目的のため，ジョアン・アベランジェの後任である FIFA 会長となったジョセフ・S・ブラッターは，それらの目的を達成する仕事を会長のアシスタントである，スペイン人のミゲル・ガヤン・トレス，およびジョアン・アベランジェ会長のアドバイザー，ブラジル人のホセ・ボネッティに任せることとなったが，それらの最初のミーティングにおいて，この２人はゲーム規則の中に使われているピッチ（コート）サイズ，もしくはボールの仕様などにおいて，まったく統一性もなかったことが判明した。

1986 年１月より，ガヤン・トレスとボネッティは真摯に統一作業を開始し，基本的なテンプレートとして，サッカーのルールを用い，それらは「ファイブ・ア・サイド」バージョンのために必要な部分修正を図った。その中には，ハンドボールと同一のピッチサイズとゴールサイズを持つことがそれらの決定に含まれていたほか，FIFUSA ルールからいくつかの提案が組み込まれ，アイスホッケーから用いられたものもあった。こうした長い準備期間の後，暫定的なルールが完成することになったが，規則がどのように実際の場で機能するかを見極めるため，それらをテストすることが必要であったため，この点で，その時のスペインサッカー協会会長であったパブロ・ポルタ・ブッソン（スペインサッカー協会／RFEF）および FIFA の実行委員会のメンバーの関与は重要であった。試験的な選手権開催の必要性があるため，スペインサッカー協会（RFEF）から承認を得た後に，パブロ・ポルタ・ブッソンは，ハンガリーサッカー協会が最初のテストトーナメントを開催する意思があることを FIFA に理解させ，1986 年，ベルギー，オランダ，米国，スペイン，ペルー，ブラジル，イタリア，ハンガリー（主催国）が参加し，オランダの優勝によって幕を閉じた。この国際イベントは成功裡に終了し，統一されたルールが実際の国際大会の場で正常に機能したことが証明された。

その後まもなく，様々な国からの担当者が出席したマドリッドの RFEF（スペインサッカー協会）オフィスのミーティングにおいて，2 回目の試験的なトーナメントを開催するため，RFEF（スペインサッカー協会）が立候補し承認されたため，第２回目のテストイベントは 1987 年２月にスペインのラコルーニャ，エルフェロール，およびサンチアゴ・デ・コンポステラで行われた。出場国はベルギー，ブラジル，オランダ，米国，ポルトガル，ハンガリー，およびイタリアであり，ホスト国は最終戦で優勝したベルギーを破るなど好評を得た。

1987 年９月に，ガヤンとボネッティは，南アメリカで３回目のテストトーナメントを催すことを提案し，ブラジリアにおいて，ブラジル，チリ，ペルー，アルゼンチン，ベルギー，オランダ，ポルトガル，スペイン，米国，およびパラグアイによって争われ，この大会はパラグアイが優勝した。三回のテストトーナメ

ントによって競技規則は期待に十二分に添うものとなることが確認されたため，あとはそれらがFIFAの実行委員会によって公式に承認されるのを待つだけとなった。ブラジルにおける1987年のトーナメントの後で，ガヤンはジョセフ・S・ブラッター会長と会談し，基本的な準備業務は終了したこと，そしてフットサルの世界選手権大会を開催することが可能であることを報告し，それを受けたジョセフ・S・ブラッター会長はFIFAフットサルワールドカップの開催組織の編成を指示した。また，オランダにおけるフットサルの責任者であったトム・ファン・デル・フルストは，オランダがフットサルワールドカップを開催する能力を証明したことで，オランダサッカー協会による大会開催申請はFIFAの実行委員会に承認されることとなった。

第一回のワールドカップ開催までのプロセスは，順調に進められ，世界選手権大会の開催までにはさほど多くの時間を要することはなかった。これは，これまでのFIFUSA役員の多くがFIFAのフットサル役員として移動したことも一因となっている。

記念すべき第一回のフットサル世界選手権大会（後にワールドカップ）は1989年1月オランダのアムステルダム，アルンヘムレーワルデン，ユトレヒト，およびロッテルダムなどのホスト都市で各大陸より16チームが参加して開催された。この記念する大会ではブラジルが初代の世界チャンピオンとなった。ブラジルは，その後1992年の香港大会と1996年のスペイン大会で優勝を勝ちとったが，2000年のグアテマラ大会，2004年の台湾大会では，世界チャンピオンをブラジルから奪取したのはスペインであった。

さらに2008年のブラジル大会，2012年のタイ大会では再度ブラジルが優勝を取り返したが，この大会のいずれも決勝戦はブラジル対スペインの争いであったことは特筆される。この2大強国のトップ争いは４度に渡り，南米と欧州の覇権争いの様相を呈している。

また，この２大地域に割って入るのがアジアのイランである。1992年には４位に入り，2016年には３位に食い込むなど，アジアでもフットサルが上位に進出できる可能性を示している。

フットサルは，既存のアリーナ（体育館）などを利用して実施されるため，一般的には新規に多くの施設を建設する必要がないように捉えられるが，アフリカなどはまだ施設数も少なく競技人口も少ないため，全土に普及しているとは言い難い状況であったが，次第にその実力もトップクラスに迫る勢いであり，サッカー強国がフットサル強国となる可能性が高いことを考慮すれば，アフリカ勢のトップクラス進出は時間の問題であるといえる。加えて中東などもイランの活躍に触発され，次第に高い実力を備えつつある。

今日，フットサルはフットボールファミリーの一員となり，我が国でも約200万人を超えるプレーヤー（男性と女性）とともに，近年では最も速く成長したスポーツとなった。また，FIFAによって世界選手権大会（ワールドカップ）が実施されるようになったことに伴い，フットサルは単なるレジャーや楽しみのスポーツとしてだけではなく，世界的に公式なスポーツ競技として位置付けられるようになった。

Ⅲ．我が国における発展経緯

3.1 創成期：我が国におけるフットサルの誕生と普及

世界でFUTSALが組織的な揺さぶりを受ける中で，混沌とする時代であっても，事柄を始動させるのは「人」である。FUTSALの世界では海老澤であった。海老澤は1923年，東京練馬に江古田教会を創設された海老澤亮牧師の四男として生を受けた。そして同志社大学神学部在学中に繰り上げ卒業の学徒兵として戦場へ赴いている。ソ満国境寸前で敗戦，捕虜としてシベリアへ抑留されている。過酷な虜囚生活を耐え抜き，同じ境遇のドイツ兵からはドイツ語を，また監視役のロシア兵からはロシア語まで学び帰国している。そして1948年から横浜YMCAに勤務し，戦後の日本がまだ国際社会への復帰を果たせていない1951年，

アメリカ YMCA の招きを受けて渡米し，オハイオ州立オペイリン大学神学部で学んでいる。日本 YMCA 内きっての俊英であったとされている。1953 年に帰国し横浜 YMCA に復職している。

図表２：FIFA ワールドカップの開催国と歴代上位国

開催年	開催国	優勝	準優勝	3位	4位
1989年	オランダ	ブラジル	オランダ	アメリカ	ベルギー
1992年	香港	ブラジル	アメリカ	スペイン	イラン
1996年	スペイン	ブラジル	スペイン	ロシア	ウクライナ
2000年	グアテマラ	スペイン	ブラジル	ポルトガル	ロシア
2004年	台湾	スペイン	イタリア	ブラジル	アルゼンチン
2008年	ブラジル	ブラジル	スペイン	イタリア	ロシア
2012年	タイ	ブラジル	スペイン	イタリア	コロンビア
2016年	コロンビア	アルゼンチン	ロシア	イラン	ポルトガル
2021年	リトアニア	ポルトガル	アルゼンチン	ブラジル	カザフスタン

3.2 YMCA とその活動

その頃，ブラジル・サンパウロ YMCA の総主事であったバウロ・ロトフは，YMCA 本来の高い指導理念の基に新たな活動計画を立て，スイスの世界本部に提案をしていた。それは，戦争によって閉ざされたままになっている世界を YMCA 活動による若者の交流によって開き，あわせて白人上流社会中心になっているサンバウロ YMCA の活動を広く，本来の精神に則り活性化しようというものであった。

５カ国から５人の若者を５年間，サンパウロを中心にブラジルで「国籍・民族・宗教・障害のあるなしに関わらず青少年を育成するという YMCA 活動に就かせる」という提案であった。日本，ドイツ，イタリア，スペイン，ウルグアイから選び抜かれた若者が招かれた。日本 YMCA は，海老澤を派遣することになった。

1956 年 11 月 3 日，移民船アメリカ丸は，新世界をブラジルに求める大勢の移民の希望と不安を乗せ，横浜港を発った。海老澤は宣子夫人と娘の道子さん（当時５歳）を伴ってこの船に同乗した。ここでも海老澤は移民業務に携わる外務省監督官の手助けをする助監督の役割を当てられている。船は 43 日間，ハワイ，ロスアンゼルス，パナマ運河，コロンピア，ヴェネズエラ，そして，リオを経てサントスに辿り着いた。この船は貨物船でもあった。ブラジルでの海老澤は，日常の YMCA 活動の他に各地の日系人社会を訪れ，または招かれ，一世が築いた土台の上に二世がようやく社会的地位を向上させつつあった日系人を励まし，指導を行っていた。また，ブラジルに進出しはじめていた日本企業の人々のまとめ役も果たしている。

そうした獅子奮迅の働きの合間に，ブラジル，特にサンパウロの人々の都会生活の状況をつぶさに観察すると，彼らの間にすでに一種の文明病が広がっていることに気がつくことになる。それは便利な生活がもたらす運動不足からくる肥満と生活習慣病であった。上流階級の人々はその解消について，YMCA をはじめとする各種スポーツクラブに求めていたのである。海老澤は今後，復興が進む日本の未来図をそこに見て，この問題はいずれ日本で起こるであると予測していた。当時そうしたクラブで盛んに行われていたスポーツの一つに「FÚTEBOL DE SALÓN（現 FUTSAL）」があったのである。しかも，このスポーツは子供やクラブには通えない層の人々に最も愛好されているスポーツであることを認識していたのである。路上で，あるいは少々の空き地で，人々が楽しんでいる圧倒的に人気の高いスポーツがフットサルであった。

海老澤は丸５年の研修・奉仕活動を終え，ご夫妻は，この異文化の中から日本へ持ち帰るべきは「FÚTEBOL DE SALÓN（現 FUTSAL）」以外にはないと確信したという。そして，このスポーツの自由で誰もが手軽に楽しめると同時に，競技として高い技術性を必要とする面白さは必ず日本人に受け入れられると予測されたということであった。

1962 年（昭和 37 年） ３月に海老澤は，ブラジル YMCA での５年間にわたる活動を終えて帰国した。その後，横浜 YMCA に復職し，1964 年８月まで在職することになる。そして 1964 年９月には，海老澤に札幌 YMCA（後に北海道 YMCA に改組）への勤務の命が下る。他の地域ではなく，北海道への転勤命令は，あたか

もフットサルを北の大地へ招いたが如くであり，偶然とは言え運命的な縁となった。海老澤は常々この競技は将来，北海道と沖縄で発展するのではないかと宣子夫人に語っていたという。

1964 年 11 月，海老澤は札幌 YMCA 総主事として活動を開始した際，宣子夫人は，1965 年春に YMCA 内へ幼稚園を開設し，YMCA のレクリエーションホールを活用して幼児体育に取り組んでいる。これは，我が国における幼児体育のスタートであった可能性がある。その種目の一つとして，「FÚTEBOL DE SALÓN（現 FUTSAL）」を取り入れたという。その時はバレーボール競技用ボールを用いての「室内サッカー」であった。

２年後の 1966 年 10 月には海老澤が，この幼児体育教室を発展させた形での少年体育教室を開設し，そこには，室内少年サッカー教室が含まれていた。そして，翌 1968 年春，ブラジルから朗報が入る。

サンパウロ YMCA のメンバーであり，サンパウロ大学で土木工学を学んだ日系ブラジル人・鈴木武（当時 27 歳）が，道費留学生として北海道大学（以降北大）に土質の研究の為に来日するとの知らせが入ったため，早速，海老澤は鈴木にフッチボール・デ・サロンの競技規則とボールの持参を依頼した。

1967 年４月に来日した鈴木が持参した競技規則を海老澤は鈴木と共に翻訳した。このルールに則って日本初のフットサル競技大会を開催するべく，鈴木は北大の留学生と YMCA 高校生を対象にルールの理解促進を含めたトレーニングを開始したのである。この時，海老澤がブラジルから帰国してから６年の月日が経過していた。

そして，1968 年 11 月 10 日，札幌市・中島スポーツセンターでの第一回北海道 YMCA 体育大会において北大留学生チームと YMCA 高校生チームが対戦している。これが我が国初の「FÚTEBOL DE SALÓN（現 FUTSAL）」の試合であった。勝負は留学生チームが４対３で勝利している。

これは，現日本フットサル連盟の前身である「日本ミニサッカー連盟」が発足する９年と２日前のことであった。1967 年 11 日付の北海道新聞には，写真入り五段抜きで「本道初の室内サッカー公開」と大々的にとり上げられ，「ブラジル留学生チーム普及に乗り出す」とのサブタイトルがつけられている。同紙上で海老澤は「室内サッカーは恐らく国内でも初めてでしょう。（中略）道内の小・中学校で冬のスポーツとして大いにのびる可能性がある」と自信を深めたようであった。また，その際レフェリー役をつとめた鈴木は「早くブラジルなみに盛んになって欲しい」と語っていたとの記述がある。

海老澤はまた別紙に「このスポーツは幼児から大人まで十分に楽しめる（中略）北海道のような雪国では，冬の室内スポーツに最適。これを機会に室内サッカー協会もつくって大いに普及したい」と語っている。1968 年は，メキシコオリンピックでサッカー日本代表が３位入賞を果たしている。

北海道新聞 12 月 20 日号は「盛んなチビッ子サッカー」と銘うって，「室内の幼稚園サッカーをママも一緒に意欲的に取り組んでいる」と YMCA の幼児教室を写真入りで大きく取り上げている。

また「“冬もサッカーを”という強い願いをもっている道内各地の小・中学校から，全国に先駆けて室内サッカーを南米から直輸入した YMCA に問い合わせが相次いでいる」と報じた。その後，海老澤は北海道サッカー協会の故原崎理事長，また後述の札幌大の柴田らを招きこの競技を披露し，普及に関する話し合いをするが，北海道のサッカー関係者の眼は未だ開かれなかった。柴田らが本格的にこの競技にとり組むには，なおもこれより５年を要している。

3.3 海老澤から柴田へ

北海道は明治以降，本土からの入植者達によって切り開かれた開拓の地である。柴田[6)]はまさにその大志気質の持ち主であり，その柴田によって日本におけるフットサルの基礎が北海道に築かれ，更に日本全体へと展開していったのである。

その柴田が，フットサルの種を北海道にもたらした海老澤と出会うことになる。柴田が本格的にフット

サルに取り組み出すまでには，その後５年という長い時間を要している。この５年間の空白期間の原因には，意外な理由があった。柴田によれば，11 月 10 日の大会の後に，柴田と当時の北海道サッカー協会理事長の原崎[7]は，海老澤に招かれ，YMCA の体育館で「FÚTEBOL DE SALÓN（現 FUTSAL）」の説明を受け，小さな弾まないボールを実際に蹴ってみたところ，柴田や原崎は，そのボールでどのように競技が展開されるのか，競技そのものの全容が理解できなかったということであった。つまり，本物のゲームを観たことがないため，ゲーム展開のイメージが湧いてこなかったということである。特に原崎は，室内で５人制というこの競技が 11 人制とどのように結びつくのかを判断しかねたようで，アウトドアではできないかと思案したという。結局，柴田はこの競技を今すぐに道内に導入する必然性がない，という結論を下してしまう。この当時は，北海道のサッカーは発展期にあり，柴田は土・日ともなれば広い道内を飛び回り，小学生から社会人に至るまでの全力テゴリーのサッカー指導に明け暮れ，他に目を転じる余裕がなかったというのが理由であった。北海道の冬の到達は早く，10 月末には雪が降りはじめる。その冬は長く，春は遅いため，海老澤によって撒かれた「FÚTEBOL DE SALÓN（現 FUTSAL）」の種は，北の大地で遅い春を待ち続けることになる。

3.4 インドアサッカー文化の開花

一度封印されたフットサルの扉はどのようなタイミングで開かれたのか。この冬の間にも柴田自身を突き動かす大きな胎動が，実は世界のサッカーですでに始まっていたことを，柴田は自らが発行した北海道のサッカー情報紙『北のサッカーアンビシャス』の６月号で触れている。その鍵は 1966 年第６回サッカーワールドカップスウェーデン大会，同 1970 年第７回ワールドカップチリ大会で優勝したブラジルサッカーが世界に与えた圧倒的な強さの衝撃を受けたことによるという。

日本フットサルの先駆者である海老澤から先駆者・柴田へ引き継ぎがなされたはずのフットサルは，しばらくの停滞期間を経たが，1966 年，1970 年のワールドカップ・スウェーデン大会のブラジルチームの驚異的な快進撃によって再び刺激を受けることになる。この時，柴田の胸にこの圧倒的な高い技術水準が深く刻み込まれたという。やがて，その印象と YMCA で見せてもらった室内サッカーが結びつく時がくる。

柴田の胸には，次第にブラジルの強さの根源は何かという問いが大きくなっていった。そしてついに，その問いの答えが導き出されることになった。その経緯を柴田が主宰し発行する「北のサッカーアンビシャス」より引用すると，1966 年の秋，この年の天皇杯優勝前に，ヤンマーサッカー部は札幌大学で２日間の調整合宿を行ったが，その１日が雨であった為に，練習は体育館で行うこととなった。ヤンマーには３人のブラジル人がいたが，怪我のカルロスを除いた２人の日系人選手に驚愕した様子を「１対１の攻防練習で，ずば抜けた足技を見せつけたのは，ネルソン吉村とジョージ小林であった。当時の日本ではまったく考えられないボール捌き，そして足裏でのコントロール，さらには自在性の高い技術など，どの技術をみてもブラジル選手特有の高いボールコントロール技術がそこにあった」と記している。さらに，このブラジル技術の奥義は，ブラジルから持ち込まれた「弾まない小さなボール」に何か秘密が隠されているのではないかという思いに行きついている。1972 年 12 月，やはり本場で本物を直接観ようと決意した柴田はブラジルへ旅立つことになる。当時，ブラジルへ行くための旅行には大金が必要であった。当時，大卒新人社員の給料は２万円弱，15 年勤務の公立教員でも３万円台であった。一般のサラリーマンの２年分に近い給料に匹敵する金額を注ぎこんだこの旅は，まさに一世一代の大旅行であったという。更にこの旅を陰で支えた２人の人物がいた。柴田は，この旅を当時の日本蹴球協会（現 JFA）専務理事の小野に相談している。小野は柴田の志の高さを評価し，日本蹴球協会（現 JFA）の会長であった野津に報告，会長もこれを快く思い，サンパウロサッカー協会会長宛の推薦状，紹介状などを作成してくれたという。

3.5 我が国初のサッカー留学生

柴田によるブラジルへの旅行目的は，フットサルそのものの直輸入を試みると同時に，札幌大学へのブラジルからのサッカー留学生２名の招聘ということも目的としていた。しかし本邦初のスポーツ留学生の受け入れであったため，法的な手続きなどが煩雑であったことも手伝い，文部，法務，外務各省の調整に４日間を費やしたが，法務省の係官の親切な指導は印象深かった。

柴田はサンパウロへ到着次第すぐに現地で記者発表行い，日系新聞三社（毎日，バウリスタ，ニッケイ）に募集記事が掲載され，その条件は「高卒以上であること。」「日本語能力が一定以上あること。」「サッカーに秀でた者であること。」の三点に重点が置かれた。１月７日，日本カントリークラブでのテストに７名の日系人が応募してきたが，その中からネルソン松原，セルジオ門岡の２名が選ばれた。この２名の留学生は，札幌大学のサッカーを大きく改革させ，日本の大学サッカーにも新風を与えただけでなく，さらに日本のインドアサッカーにも新しい展開をもたらすことになった。

3.6 もう一つのインドアサッカーのルート（日本初の室内ミニサッカー大会）

サロンフットボールが全国へ伝播し，同時に全国的な組織作りが動き出す中で，実はその前に日本初の屋内サッカー大会が日本サッカー協会の主催で開他されたことは，あまり知られていない。

日本初の室内サッカーの公式戦は，50 年前の 1973 年に日本サッカー協会によって開催されていた。

1973 年といえば，柴田らが苦難の末にブラジル調査旅行を終えてようやく「FÚTEBOL DE SALÓN（現 FUTSAL）」を日本へ持ち帰った年である。室内でボールを蹴るなどという発想は，在日ブラジル人の他には想定できなかった時代に，インドアサッカーを実施した経緯はどこにあったのか。

中心となったのは，後に日本サッカー協会第９代の会長となった岡野俊一郎[8]であった。岡野は，当時すでにヨーロッパのフットボールの公式記録や，サッカーの情報をつぶさに観察していた。その中に英国サッカー協会が，ウェンブリーのプールの水を抜いて壁面を利用したインドア・サッカーをファーストディビジョン（今のプレミアリーグ）のチームで行なっていたこと。また，西ドイツでは，ドルトムントのヴェストファーレン・スタジアムで低い壁（約１m 程）を体育館の床上にめぐらして，トッププロチーム（現在のブンデスリーガ）が，冬のシーズンのエキシビョンゲームとしてのハーレンフッスバル（室内サッカー）を行ったという情報を掴んでいた。そこへ仙台の学校の体育館で室内サッカーを定期的に行っている人達がいる，という情報が入ったことが大きなきっかけとなって，一度やってみようと決心することになったという。

また，南半球の「FÚTEBOL DE SALÓN（現 FUTSAL）」に着手しなかった理由は，知識が不足していたわけではなく，その内容は十分に把握していたという。特有の弾まないボールも 1971 年にはすでに当時の日本リーグの中心選手であったネルソン吉村がブラジルから持ち帰ってくれたものを所有していた。

しかし，これを使うためには，メーカーに新たな専用ボールの製造を依頼しなければならず，それはそれで相当な手間と負担を必要としたため，４号球または５号球のサッカーボール使用を基本に考えると，インドアサッカーという選択肢となった。当時は室内サッカーに対する関心を持つ人はほとんど居なかったことから，ルールについても岡野が調整し，審判も全て岡野が指導することで実現にこぎつけた。

こうして，1973 年２月 25 日，東京駒沢屋内競技場において「第１回ミニサッカー選手権大会」が日本サッカー協会主催，毎日新聞社，NET テレビ後援のもと，日本サッカーリーグの８チームによって行われたのである。参加チームは，東洋工業，藤和不動産，トヨタ自工，日立製作所，三菱工業，新日鉄，古河電工，ヤンマーの８チームであった。結果は，ネルソン吉村を擁するヤンマーがセルジオ越後率いる藤和不動産を０対０の後，PK 戦で下し優勝している。この時，都内からは目黒十条，同十一中，開進二中，中野

八中が招待され，中野八中が優勝している。翌1974 年も第２回大会が開催され，前記８チームが参加し，古河電工がヤンマーを破り優勝している。この時の小学生クラスでは，都内の大向，上石神井北，町田SSS ，用賀のスポーツ少年団も招待され，上石神井北スポーツ少年団が優勝している。

しかし，この大会は２回の開催のみで，以後開催されることはなかった。その際，関係者からは協賛社の獲得が継続できなかったことによる理由が説明された。しかし，この日本サッカー協会主催の室内サッカー大会がその後のフットサルに影響を与えることになったと推測される。

3.7 室内サッカーの本格的な試み

柴田は帰国の後，（株）モルテンに室内サッカー用のボールの製作を依頼し，同社は弾まない３号球を亀甲の白黒模様で試作した。その試作球を用いて札幌大学の留学生であるネルソン松原，セルジオ門岡両留学生は「FÚTEBOL DE SALÓN（現FUTSAL）」の競技方法や戦術を部員達に体育館で伝授した。彼ら２名の高い技術力は日本人の部員らを心酔させたと同時にチーム全体の技術力向上に役立った。

例年10月末には降雪がある北海道において，この「FÚTEBOL DE SALÓN（現FUTSAL）」によるトレーニングが，やがて秋の大学選手権の快挙につながっていくことになる。

また彼等は，このボールで小学生や母親達をも指導している。1965年には海老澤夫人が幼児に室内サッカーを教え，母親達と興じてから８年の年月が経っていた。そして迎えた1974年４月，留学２年目の春からこの「FÚTEBOL DE SALÓN（現FUTSAL）競技規則」の本格的な翻訳が柴田の指導のもとにネルソン松原，セルジオ門岡両名の協力を得て始まったのである。

柴田とネルソン松原，セルジオ門岡の両留学生，そして，札幌大学サッカー部１期生でコーチであった福江の４名がルールブックの翻訳作業に入ったのは1974年３月であった。日常生活に支障のない程度の日本語は話せても，正確な翻訳となるとネルソン松原，セルジオ門岡の日本語には正確性を欠いた。柴田はポルトガルの辞書を傍に置き，身振り手振り，さらに図解しながら仕事を進めた。

１日１ページを目標に互いの仕事勉強を終えた夕食後の時間を割いて翻訳を重ねていったとされる。どのようなスポーツでも競技規則こそがそのスポーツの魂であり，競技者の支えである。競技規則の確立なしに競技の普及はもちろん発展もあり得ない。困難はあったが，地道で実のある努力によってその年の12月，ポルトガル語版の国際フッチボール・デ・サロン連盟（FIFUSA）によって作成された競技規則の日本語訳が完了した。

3.8 サロンフットボールの誕生

ポルトガル語の競技名をインドア・サッカーにするか，サロンフットボールにするかが話し合われたが，柴田提案の名称が採り上げられた。そこで，柴田は「日本サロンフットボール普及会」を設立し，組織化の草案を作成，その上に「日本サロンフットボール協会設立準備委員会」を立ち上げ，委員長にこの競技の先導者である海老澤を迎えている。

さて，留学生によって全訳されたルールであったが，これを本にしなければならない。つまり，次の難関は印刷出版であった。原文で88ページのポルトガル語は日本語訳すると180ページ程の分量になってしまうため，20〜30万円（現在は約10倍）は必要となるとのことであった。一方「初心者に普及の段階で分厚い完訳のルールブックが必要なのか」という指摘もあり，柴田らは，競技の特性を理解できる必要最小限度の簡潔な要約の方がむしろ大切であるという結論に至り，1975 年 12 月に日本初の国際競技ルールブックが出版された。

図表３：FUTSAL 日本国内年表（概略／～2002 年）

年　代	日本の変遷
1948 年	札幌市民6人制大会が大通り公園特設コートで行われ、後の札幌市民体育大会（11人制）に発展した。
1956 年	札幌YMCAの海老澤義道氏がブラジルへ研修の旅に出発した。
1957 年	第1回熊本県6人制サッカー大会（屋外）が開催された。
1962 年	海老澤氏がブラジルの研修から帰国した。
1964 年	
1965 年	海老澤氏が日本YMCで幼児教育として室内フットボール教室を開始した。
1966 年	海老澤氏が札幌YMCA総主事として転勤し、北海道で室内フットボール教室を開始した。
1968 年	札幌市中島スポーツセンターで北海道YMCA主催の体育大会が開催され、北大留学生チームとYMCA高校生チームが対戦した。
1970 年	留学生チームが勝利したが、これが国内初の「室内サッカー」の試合
1971 年	日本初の屋内ミニサッカー大会となる第1回岩見沢室内サッカー大会が岩見沢サッカー協会主催により開催された。
1972 年	札幌大学柴田勗教授は、サロンフットボール調査のためにブラジルへ渡り、札幌大学にてサロンフットボールを開始した。
1972 年	日本蹴球協会が日本サッカーリーグ全8チームで「第1回ミニサッカー選手権大会」が駒沢体育館で開催され、ヤンマーが優勝した。
1973 年	日本蹴球協会が「第2回ミニサッカー選手権大会」が開催され古河電工がヤンマーを破り優勝した。
1975 年	日本ミニサッカー研究会発足。「要約国際式サロン・フットボール競技規則」が当時札幌大柴田教授によって出版される。
1975 年	柴田教授らが「サロンフットボール普及会」を発足。
1976 年	日本サロンフットボール協会が設立される。
1977 年	第1回北海道サロンフットボールフェスティバルが中島スポーツセンターで始まる。以降毎年開催されている。
1977 年	日本サッカー協会傘下の組織として「日本ミニサッカー連盟」が発足された。
1979 年	全国少年総合ミニサッカー大会が開催された。
1980 年	
1981 年	国際サロンフットボール大会が開催され、ブラジルの「FCパネスパ」を招待し、在日ブラジル人を中心とした日本選抜を編成して試合を行なった。
1982 年	パルメイラス来日、日本武道館にてリベリーノを加えた日本リーグのブラジル人を中心とした日本選抜と試合を行なう。
1983 年	
1984 年	関東社会人選手権大会が開催され、東京選抜が優勝、静岡が準優勝。
1984 年	
1985 年	日本ミニサッカー連盟によって第1回日本選抜サロンフットボール選手権大会が開催。　※札幌が優勝
1985 年	ブラジルから日系ブラジル人の「FCピラチニンガ」が来日し、全国各地で試合を行なう。日本代表と練習試合を行なう。
1985 年	
1986 年	日本ミニサッカー連盟によって第2回日本選抜サロンフットボール選手権大会が開催。　※札幌が優勝
1986 年	日本ミニサッカー連盟によって第3回日本選抜サロンフットボール選手権大会が開催。
1987 年	日本ミニサッカー連盟によって第4回日本選抜サロンフットボール選手権大会が開催。
1987 年	日本ミニサッカー連盟によって第5回日本選抜サロンフットボール選手権大会が開催。
1988 年	日本ミニサッカー連盟によって第6回日本選抜サロンフットボール選手権大会が開催。
1988 年	日本ミニサッカー連盟によって第7回日本選抜サロンフットボール選手権大会が開催。
1989 年	日本ミニサッカー連盟によって第8回日本選抜サロンフットボール選手権大会が開催。
1990 年	日本ミニサッカー連盟によって第10回日本選抜サロンフットボール選手権大会が開催。
1990 年	第1回全日本少年ミニサッカープレ大会が開催された。
1991 年	日本ミニサッカー連盟によって第11回日本選抜サロンフットボール選手権大会が開催。
1992 年	第1回全日本少年ミニサッカー大会（本大会）が開催された。　※読売日本サッカークラブが優勝
1992 年	日本ミニサッカー連盟によって第12回日本選抜サロンフットボール選手権大会が開催。
1993 年	日本ミニサッカー連盟によって第13回日本選抜サロンフットボール選手権大会が開催。
1994 年	日本ミニサッカー連盟によって第14回日本選抜サロンフットボール選手権大会が開催。　以降毎年開催
1994 年	
1994 年	「日本ミニサッカー連盟」を「日本フットサル連盟」に名称を変更。それに伴い全国選抜大会を「ミニサッカー」から「フットサル」へ変更。
1995 年	京都府フットサル連盟が設立される。
1995 年	滋賀県フットサル連盟が設立される。
1995 年	兵庫県フットサルリーグが始まる。
1995 年	「日本ミニサッカー連盟」を「日本フットサル連盟」に名称変更。会長に鳩山邦夫氏就任。
1995 年	第1回全日本ジュニアユースフットサル大会が開催された。　※札幌第一ｼﾞｭﾆｱﾕｰｽが優勝
1995 年	日本サッカー協会主催　FUTSAL全日本選手権大会プレ大会が開催される。　※ホーコク工業株式会社が優勝
1995 年	日本代表監督は榮氏、コーチにアデマール・ペレイラ・マリーニョ氏が就任。

1996 年	日本フットサル連盟主催による大使館対抗フットサル大会が開催される。	
1996 年	日本サッカー協会主催　第1回FUTSAL全日本選手権大会が開催される。	※ルネス学園甲賀が優勝
1997 年	日本サッカー協会主催　第2回FUTSAL全日本選手権大会が開催される。	※府中水元クラブが優勝
1998 年	日本サッカー協会主催　第3回FUTSAL全日本選手権大会が開催される。	※ルネス学園甲賀が優勝
1998 年	日本フットサル連盟によって第14回全国選抜フットサル選手権大会が開催。	※ASPA　FCが優勝
1999 年	東京都フットサルリーグが始まる。	
1999 年	千葉県フットサルリーグが始まる。	
1999 年	神奈川県フットサルリーグが始まる。	
1999 年	関東フットサルリーグが始まる。	
1999 年	静岡県フットサルリーグが始まる。	
1999 年	日本サッカー協会主催　第4回FUTSAL全日本選手権大会が開催される。	※ファイルフォックスが優勝
1999 年	日本フットサル連盟によって第15回全国選抜フットサル選手権大会が開催。	※日本選抜が優勝
1999 年	全国選抜フットサル大会を地域からの選抜チームによる大会へと変更。	
1999 年	日本代表監督はアデマール・ペレイラ・マリーニョ氏。	
1999 年	※以降AFCアジア選手権大会が年度の公式行事に	
1999 年	日本フットサル連盟改組再編プロジェクト発足、ワーキンググループスタート。	
1999 年	各都道府県において連盟化始まる。	
2000 年	関西フットサル連盟設立され、関西フットサルリーグが始まる。	
2000 年	北海道フットサル連盟が設立され北海道社会人フットサルリーグが始まる。	
2000 年	千葉県フットサル連盟が設立される。	
2000 年	大阪フットサル連盟が設立され、大阪フットサルリーグが始まる。	
2000 年	兵庫県フットサル連盟が設立される。	
2000 年	日本フットサル連盟を改組再編し、会長に長沼健氏が就任。	
2000 年	AFCコーチングコースが中国にて開催。浜口氏、須田氏参加。	
2000 年	日本代表監督はアデマール・ペレイラ・マリーニョ氏。	
2001 年	第1回ティファールカップレディスフットサル大会が開催される。	
2001 年	日本国内初の有料試合「日本選抜対FCバルセロナ」が幕張メッセにて開催された。6-1	
2001 年	第1回地域チャンピオンズリーグが開催され小金井ジュールが優勝した。（代々木体育館／5月連休開催）	
2001 年	第17回全国選抜フットサル大会が全チーム各都道府県の選抜チームに。	
2001 年	日本代表監督は木村和史氏が就任。	
2001 年	第2回ティファールカップレディスフットサル大会が開催される。	
2001 年	フットサル日本代表編成・強化をフットサル委員会から技術委員会へ。	
2001 年	AFCコーチングコースが台湾にて開催。原田氏、須田氏参加。	
2001 年	日本フットサル連盟の技術部によって初の中央トレセンがスタートする。	
2001 年	日本国内2度目の有料試合「日本選抜対FCバスコ・ダ・ガマ」が横浜アリーナにて開催された。	
2001 年	日本選抜が編成されブラジル遠征が実施された。　TOPPER CUP　3位	
2001 年	日本代表監督に原田理人氏が就任。	
2002 年	3月「REAL　MADRID　100周年記念イベント」に日本代表が招待される。スペイン0-16、エジプト2-1、優勝はスペイン4-3ブラジル。	
2002 年	第2回地域チャンピオンズリーグが開催され、ファイルフォックスが優勝した。（代々木体育館／床をフローリングに改修）	
2002 年	第18回全国選抜フットサル大会のために各都道府県において予選大会が始まる。	
2002 年	第18回全国選抜フットサル大会が開催される。	
2002 年	第3回ティファールカップレディスフットサル大会が開催される。	

このルールを元に柴田は，翌年２月，第１回北海道サロンフットボールフェスティバルを大々的に開催することとなった。特筆すべきは，このフェスティバルには，セルジオ越後，ジョージ与那城，セイハン比嘉などの日本リーグで活躍する日系ブラジル人選手が招待されており，参加者に直接指導した点にある。

3.9 北海道サロンフットボールフェスティバル

1976 年 2 月 23 日，「HTB 杯第一回北海道サロンフットボールフェスティバル」が，北海道立中島スポーツセンターで開催された。これは有料(500 円) 入場であり，2,500 人収容の会場はほぼ満席となった。

当時はまったくのニュースポーツであり，知名度の低い「サロンフットボール」であったが，このフェスティバルは大好評であった。しかし，その成功の裏には，柴田らの様々な努力と苦闘があったのである。

北海道，もしくは札幌の代表的な名物行事といえば，毎年２月に開催されている「雪まつり」である。

降雪時期でもあるため屋外でのボール競技は実施不可能である。提案者はなんとセルジオ越後であったという。傑出したアイディアマンである越後は，前年の冬に講習を兼ねて来道し試作球をチェックするなど，この企画の相談相手になってくれていた。彼はブラジル人にとって雪は極めて珍しい，雪まつりを観に来るということであれば，自費でも参加してくれることは間違いないというのである。そして，「雪まつりにフットサル・フェスティバルを開催し，日本リーグ選抜という形でブラジル人を集めたら」と提案した。予想どおり，ジョージ与那城，セイハン比嘉，デュアレス･M ・ディアス等が参加した。

参加チームは，小・中・高，そして大学の招待チームとした。試合に先立って，セルジオ達は小学生高学年を対象に，フットサルの楽しみ方，遊び方を指導した。のちにセルジオが全国を巡って少年を指導する先駆けの教室となった。このまったく新しい試みに，当時，新興テレビ局であった北海道テレビ（HTB）が冠スポンサーとなってくれたのである。

実は同局の理事長は札大の理事長の石澄であり，この大会を全面的にサポートしてくれた。まず，大会予告を繰返しスポットで流し，更に大会の様子，結果も放映してくれたのである。その映像から，セルジオ越後，ジョージ与那城，セイハン比嘉らの卓越した技の数々が多くの人の目に触れた。

また“体育館でサッカーができる”ということが知れ渡った。室内でボールを蹴ることは，学校はもとより体育館でも禁止されていた時代のことである。その意義は大変大きかったのである。海老澤が先鞭をつけたYMCAの大会から８年目のことであった。

この時，招待された室蘭大谷高校はその後，フットサルをとり入れチームを強化，北海道を代表する強豪として度々全国大会で名を轟かせていった。大学の部は札大A.Bがセルジオ達の日本リーグ選抜と闘い大差をつけられながらも健闘した。

このフェスティバルを機に柴田は北海道のサロンフットボール協会，または連盟の設立を目論んでいたが，柴田の恩師でもあった当時の北海道サッカー協会の理事長原崎は首をタテには振らなかったのである。

「良いものはやろう」という前向きな原崎ではあったが，日本協会との協議によって「この競技はサッカーとは直接関与しない」との結論に立ち，正規の組織にすることに難色を示したのである。ただし普及促進については許可され，普及の道は示された。しかし柴田には，サッカーとの二足のわらじは認められないと告げられたのである。この時サッカーのみに進んでいれば，柴田の前途には思師の後を継ぐ責任ある地位が道協会に開かれていたにも拘らず，革命児と評された柴田は，敢えてフットサルという苦難の道を選択したのである。海外事情に広く通じていた国際感覚の持主の海老澤は「何でもっと寛容になれないのか，ブラジルではフットサルの連盟は何の問題もなく認められている。その自由さがサッカーを盛んにしている」と語られたという。しかし，このフェスティバルの評判が本州へも伝わり，翌年の第２回大会にはその年の全日本少年サッカーを制した漬水FC が参加している。

1977年の「第２回HTB杯サロンフットボールフェスティバル」に，前年の夏，全日本少年サッカー大会を圧倒的な強さで制した清水FCが参加したのである。当時監督であった綾部に率いられた長谷川健太，大榎克己，堀池巧といった後に日本を代表する選手たちも参加している。

このチームを札幌に送りこんだのは，少年サッカーの全国的指導者として強烈なリーダーシップで，清水市に全国少年草サッカー大会を生み出した堀田であった。しかし，当時無敵のチームであった清水FCでも決勝でフットサルに習熟していた栃木選抜に敗れてしまうという結果となった。その時，会場でその様子を観戦していたのが，当時，全国大会でも優勝経験のある島原商業監督であった小嶺，静岡学園監督の井田，更に新潟工業監督の澤村などであった。この大会の第１回から，エキジビションゲームとしてママさんフットサルも行われた。子供達のサッカーを応援するうちに自らもボールを蹴りはじめたお母さんチームが，この新しい競技にも参加した，この試合は，日本で初めてのママさんフットサルのゲームであっ

た。当時のプレーヤー達はその後もボールを蹴り続け，時に本州への遠征も行うなど活発な活動を続けた。還暦を越えた現在でも当時のメンバー同士の交流は続いているという。

HTB 杯サロンフットボールフェスティバルはその後も評判を呼び，第４回大会には全国から，当時日本リーグを沸かせたサッカーの名選手が押し寄せるようにやってくるようになっていた。件のセルジオ越後，ラモス瑠偉，アデマール・マリーニョ，ネルソン吉村，ジョージ与那城，セイハン比嘉，上田栄治，古前田充，小見幸隆，松木安太郎，野村貢など，まさに当時の日本を代表する選手達であった。

こうした活動が多くの人々を北海道へと導き，活発化したフットサル（サロンフットボール）はやがて日本全国へと展開されることになるのである。海老澤によって蒔かれた種は次第に実り始め，全国へ運ばれていくことになった。実際に全国的な活動に至るまでには約 10 年の年月を要したのである。

Ⅳ．北海道から日本全土への展開（組織化の進展）

4.1「サロンフットボール普及会」の設立

1974 年 12 月にルールブックの完訳を終了させたかたわら，柴田は，この競技の発展の為の本格的な組織作りに取り組んでいたのである。まず，1975 年１月に海老澤，吉井らを中心に，「日本サロンフットボール協会設立準備委員会」を発足させ，海老澤が委員長に就いた。同年２ 月 15 日，日本サロンフットボール協会規約・細則を仮制定。この規約に基づいて吉井が会長に就任した。

規約の第一条（名称）の項で対外的に（Federacao Japanesa de Futebol Salao）と名乗り文字通り，頭文字から「FJFS」を用いることを定めている。ところが，この「協会」という名称を諸般の事情を考察して当面は用いず，国内では「日本サロンフットボール普及会」という名称で対外活動を行う事になったのである。

4.2 フットサルを組織作りの手段に

こうした状況の中で，鍋島と武田らは栃木県内８地区にサッカー協会を確立し，県協会に統合しようという試みを行った。この８地区とは，北那須，南那須，塩谷，宇都宮，上都賀，下都賀，芳賀（真岡），安足・足利・佐野である。そして，これらの地区を組織化するのに，最も有効な手段，それがサロンフットボールであり，サロンフットボールの講習会を行うという方法で人を集め，組織化を図っていったのである。

武田は鍋島と共に足繁く各地を訪ね，当時現役選手であったセルジオ越後も積極的に加わったという。

その結果，安足・足利･佐野を除いて，栃木県サッカー協会の組織化は順調に進んだ。鍋島は，1976 年（昭和 51 年）までの五年間を上都賀病院勤務の傍ら，もっぱら栃木のサッカー，とりわけ少年サッカー，フットサルの普及に全力を尽くされ，翌 1977 年（昭和 52 年）に千葉市，蘇我の川鉄病院に転じた。

その後の栃木に於けるフットサルは，武田，大関らを中心にして展開していった。その流れを時系列で追ってみると次のようになる。

・1976 年（昭和 51 年）栃木県サロンフットボール普及会設立。
・同年 12 月，サロンフットボール公認指導員認定講習会開催。
・1977 年（昭和 52 年）11 月，日本ミニサッカー連盟設立。
・同年同月，女子Ｃ級サロンフットボール公認指導者認定講習会開催。
・1978 年（昭和 53 年），栃木県ミニサッカー連盟設立。
・同年，第一回県サロンフットボールフェスティバル開催。

その後，全国での組織化が進むことになるが，全て順調に進められてわけではない。しかし，このように新参のスポーツが成長を遂げていく際には，人を巻き込む先達の熱意が不可欠であり，関係する組織や団体との連関関係や理解促進が重要であることが理解できる。

もとより海老澤の熱意と行動力が協力者や理解者を引き寄せ，点が線となり，やがて面としての展開へと繋がってきたことは，これまでの経緯をみると明らかである。そこには人を惹きつける理念が存在し，次々に訪れる困難に対応していく際にキーマンとなる人脈の獲得が重要となる。そして組織が拡大してスポーツを持続的な活動へと成長させるには，対立構造を創り出すことではなく，丹念な組織的理解獲得の努力が必要となることが示されているといえる。

スポーツ組織は，一定の目的をもとに活動を展開している。その目的が不明確であれば組織は方向性を失い組織全体が一貫した活動を実現することができない。また，それに伴う組織の目標は，組織がその運営や経営活動によって「実現したい」もしくは「実現しなければならない」と強く望む到達状態であること，組織は，様々な環境変化に対応しながらも永続的に存続・発展させていくためには，様々な環境状態に適合させた経営目標を設定しなければならない。そのためには，内部・外部環境との調整や対応が重要となる。これまでの組織化のプロセスには，「産みの苦しみ」に苦労しながらも次第に拡大をさせながら共鳴する社会との協働促進を進めてきたことが理解できる。

4.2 FIFUSA への加盟

国内での組織的配慮には関わりなく進行していたFIFUSA より，８月にサンパウロで第１回の国際会議を開催するため，日本から役員を派遣するようにとの要請が寄せられた。そこで柴田ら関係者は協議の上，３月に留学を終了して帰国する予定であった，ネルソン松原，セルジオ門岡の両名を日本の代理役員としてこの会議に参加させることにした。そして，協会からは岩澤を役員として推挙した。さらに，国内的には前出の協会規約を仮制定ではなく正規規約として７月に改めて正規に成立させた。この時点でも海老澤を委員長とする協会設立準備委員会は活動を続け，協会と普及会という表裏の名称の下に，協会の会長は吉井がそのままつとめることになったのである。８月のFIFUSA の会議の席上，日本の正式加盟は承認され，その上岩澤がアジア地区の代表として，副会長に選出された。日本サロンフットボール協会は，国内ではなく，まず国際的に承認されることが先行したのである。

1976 年１月には「国際式サロンフットボール」の要約集が製作され，協会によって体裁が整えられた上で開催されたのが，第１回HTB 杯サロンフットボールフェスティバルであった。そこへ至るまでの「経緯」と「趣旨」を，２月海老澤は自ら筆をとり「日本サロン・フットボール協会設立趣意書」と「本協会設立の経緯」にまとめ，大会直前に各方面に配布している。

本文には「高度経済成長と過密化が進む大都会では，育ちざかりである子ども達の遊び場空間が極端に減少し，子供たちの遊びの内容が消極的になり，画一化，均一化していることが指摘されている。また，寒冷地のような望むべきものもない条件の地であっても“遊べない”“遊ばない”子供たちが増大している。特に人間形成に役立つ集団遊びやスポーツ遊びが近年減少の傾向が見られるのは，大きな社会問題といっても過言ではありません。」とあり，30 年前の文章の中でも海老澤はまさに今日の社会課題を見通していたといえる。

第１回 HTB 杯サロンフットボールフェスティバルは北海道のものであったが，これを主催していたのは「日本サロンフットボール普及会」であり，即ち協会であった。北海道で生まれ育ちつつ組織はすでに世界を見渡し，「日本」と称しはじめからは，日本全体へ向かっていたといえる。

このように海老澤による「日本サロン・フットボール協会設立趣意書」と「経緯」に関する文章が掲げら

れたが，協会設立は柴田の悲願でもあった。しかし，その願いは先にも述べたように，北海道サッカー協会理事長の原崎によって拒否された。ところが，同じ1976 年４月，「北海道サロン・フットボール協会設立御挨拶」という文章が，日本サロン・フットボール協会設立準備委員長，北海道サロン・フットボール協会会長海老澤義道の名で出されている。これは前述の趣意書・経緯を踏まえ，近い将来に「日本サロン・フットボール協会」を設立する為，その中核となるべき「北海道サロン・フットボール協会」の組織固めに入ったため，関係機関には協力を仰ぎたい旨の文章であった。

柴田は，原崎の拒否が日本サッカー協会の意向であると知ってもひるむことはなかった。それどころか，上京し，協会の技術委員会・委員長であった岡野俊一郎（元会長）に直接交渉に及んでいる。しかし，岡野の意見は一貫して，別競技，別協会ではなく，あくまでも日本協会の傘下でサロン・フットボールも進めるべきだというものであった。この結果報告を受けて当時の札幌大学の学長であった馬場は，札幌大学発信で始まったこのスポーツをなんとか良い形で生かせないものかと，1961 年の秋口に自ら上京し，協会幹部と話し合うことを決意し，学長が柴田と大学の事務局長の宮田を伴って日本サッカー協会を訪れた。その席には，技術委員会の岡野委員長，同平木普及部長，長沼専務理事の他に，朝日新聞の中条一雄他数名の新聞記者が同席した。その席で馬場学長は，北海道の地理的ハンディを克服する為にこのスポーツが必要であることを力説した。「良いことだから，やったら良いのではないか」との長沼の発言もあったが，岡野は「組織としての分離は避けるべきである。あくまでも協会傘下でやるように。できればサロンという名称ではなく。」と発言されたという。

その後，岡野は３人を銀座のレストランへ食事に招き，その席上で「ミニサッカー」という言葉が岡野の口から発信された。柴田はそうしたやりとりの一部始終を年来の朋友であり，思索の人であった千葉県で活動していた鍋島に報告し，そこから事態が急展開し始めることになる。

鍋島は，独立した協会の設立が不可能であれば，日本サッカー協会傘下の連盟として，名称をミニサッカー連盟とし，その中で各種ミニサッカー競技の一つとして，サロン・フットボールを生かせば良いのではないかと発案した。柴田はその妙案に同意し，競技としてのサロンフットボールはそのまま推進し，それを生かす協会はミニサッカー連盟として設立させることを確認した。

この頃，柴田は「FÚTEBOL DE SALÓN 競技会開催のしおり」という小文を出している。「サロン・フットボール競技は社会体育の目標である，いつでも，どこでも，だれでもが行えるスポーツとしてファミリースポーツやコミュニティスポーツに取り上げられ親しまれることを願っており，近隣の広場で，または学校体育施設解放の場等で，年齢，性別，体力，能力等に応じて幅広い層に渡って，継続的に実施されることが望ましく（中略）積み上げのリーグ戦方式の競技会に発展させてほしいものである。（後略）」これらの願いは現在では現実となっている。そして，競技会の例として「男，女，各アンダーカテゴリー，大学，シニア，ファミリー，産業別，ミックス」を挙げている。これらも，今では各地で普通に行われている。柴田によれば，これらの企案や意見の多くは鍋島の発案が基本となっている。これらサロンフットボールの有効性の共通認識を深めた集いがきっかけとなり全国的な組織作りが動き出すことになる。柴田はサロン・フットボール協会の設立を目指していたが，「日本ミニサッカー連盟」の設立へ向けて動き出す。

1975 年12 月に出版されたルールブックを元に，1976 年２月に開催された第１回HTB 杯サロンフットボールフェスティバル成功の実績を自信として，1976 年初冬に札幌大学が天皇杯に出場した際，柴田は当時日本サッカーリーグの日産の監督であった加茂周（元日本代表監督）に相談し，神奈川県新子安の日産合宿所の会議室を借り，競技普及と競技規則の周知の為に関東での初のミーティングを開くことになった。

招集するメンバーの選出は千葉の鍋島が担った。鍋島は，かつてのチームドクターとして関わった藤和不動産チームの所在地であった栃木県内の友人，及び当時の勤務地であった千葉県内の友人達に声を掛け

た。これらは後に普及の中心となる人々である。

1976 年 12 月 4 日（日曜日），小春日和の午後，集まった面々は会議室より温かいグランドの芝生に出て，段ボールを敷き，車座になり，柴田の解説を熱心に聞き入り，日本サッカーの将来について語り合ったとされる。その結果，次代を背負う子供達が，ブラジルの子供達のような巧みなボールコントロールと優れた身のこなしを身につけるには，サロン・フットボールに親しむことが一番であるという共通認識にたどり着いたという。このミーティングがきっかけとなって，全国的な組織作りが動きはじめる。中心になったのは鍋島でありセルジオ越後であった。また 1977 年の第２回 HTB 杯へ参加した清水 FC，及び小嶺，井田，澤村らのような今も日本サッカーに大きな影響力を持ち続けている面々の来道は，この動きに勢いを与えるものであった。

4.3 日本ミニサッカー連盟の誕生

1977 年（昭和 52 年），11 月 12 日に，現日本フットサル連盟の前身の日本ミニサッカー連盟が（財）日本サッカー協会傘下の団体として発足した。これは日本のサッカーにとっては歴史的な出来事であったといってよいであろう。すなわち，１種（大学生を含む一般），２種（高校生），３種（中学生），４種（小学生）という区分で構成されていた日本サッカーの枠組みの中に，５種として「女子」が生まれ，更に「フットサル」という枠が今から 38 年前誕生したのである。

初代会長に竹腰重丸，理事長には森健児が就任するという当時の日本サッカー協会の要人登用となったことから，普及・発展の活動が加速的に進められている。またフットサルに着目し，フットサルの発展に努めてきた人々の共通の願いは，日本のサッカーを世界のレベルにまで向上させたいという一点にあったことも注目される。

その大願を成就させるためには，サッカーがスポーツ文化として確実に根付かせなければならない。つまり，子供の頃から遊びとしてのフットボールに親しみ，楽しむ風土作りを進めなくてはならないため，「いつでも，どこでも，だれとでも」というフットボールを楽しむ環境作りを進める必要があった。

その最初のフットボールとの出会いがストリートサッカーであり，ミニサッカーである可能性が高いため，フットサルの重要なマーケットのひとつは子供であると定め，まずは子供の大会からスタートさせることを目指したのである。

このように日本のフットサルの基礎が形成された 1980 年代の様々な出来事や苦難を乗り越えるべく尽力した方々が日本ミニサッカー連盟をスタートさせたのである。三菱養和会での第 1 回目の少年大会を受けて，翌 1980 年（昭和 55 年）には，第 2 回全国小学生総合ミニサッカー大会が静岡県三島市で開催された。1981 年の第３回大会は，栃木県宇都宮市で栃木県及び宇都宮市サッカー協会の少年部が総力を挙げて開催した。こうして少年の大会は軌道に乗せたものの，実はこの時点で本物のサロンフットボールというものを国民はまだ観たことがなかったことが課題となっていた。前述のセルジオ越後，ルイ・ラモス，アデマール・マリーニョなど，日本サッカーリーグで活躍する国内トップ選手のプレーから，日本のサッカーにはない別格のサッカー技術にフットサルの真髄を垣間みることはあっても，本物のサロンフットボールのプレーを観たことがなかったため，次に何とか本物のチームとその試合を子供達に見せたいという願いを実現するべく組織的に奔走した。

4.4 海外チームの招待

1981 年２月，サンパウロ州ジュベニール選手権優勝チーム（ちなみにジュベニールは 20 歳以下チームの呼称）FC パネスバが来日し，我が国初のフットサル国際親善試合が実現した。「Banco de Estado saopaulo

（サンパウロ州立銀行）」の頭文字をとったこのチームは，サンパウロ州はもちろんのこと，ブラジルフットサルの名門チームであった。また，1982 年（昭和 57 年）２月には，前年の FC パネスバに続いて，サンパウロ州 U18 優勝チームが来日した。サッカーの名門クラブであるパルメイラスのフットサルチームであった。この試合は広告代理店のプロモーションによる催しであったが，日本ミニサッカー連盟の全面協力となった。前年の FC バネスバ来日の成功再現を願っただけでなく，更なる展開を企画している。

図表４：FC パルメイラス全国ツアーの会場と日程（1982 年）

2 月11日（木）八王子市民体育館
2 月13 日（土）館山市民センター
2 月14 日（日）千葉県総合運動場体育館
2 月16 日（火）尼崎市立体育館
2 月19 日（金）徳島市立体育館
2 月22 日（月）沼津市立体育館
2 月25 日（木）藤沢・秩父宮体育館
2 月27 日（土）日本武道館
2 月28 日（日）足利市民体育館

日本ミニサッカー連盟（現日本フットサル連盟）は，前年の FC バネスパの成功をさらに推し進め，この競技を一層アピールするため，主会場に日本武道館の使用を選択した。当時の日本ミニサッカー連盟は，会場の使用許可を求めて同館を訪ねたが，交渉は難航したといわれる。そもそも日本武道館はその名称のとおり，武道の普及発展のために作られた施設だったからである。しかも武道の大会の使用料金は格安であるが，企業や学校が入学式などに使用する際は通常料金であり，例え公益性の高いスポーツ団体でも料金は変わらず，「更に入場料を設定するのであれば割増となる」というものであった。当時の使用料は 700 万円／日であった。そこで連盟は入場者を連盟の会員として，会員券を購入してもらうという苦肉の策で会場を借用した。当時のサロンフットボールの人気から，収支はうまくいけば黒字も夢ではないと，当時の日本ミニサッカー連盟は意気軒昂であった。武道館の試合の日本選抜はセルジオ越後はじめ，アデマール・マリーニョ，ルイ・ラモス，セイハン比嘉，ジョージ与那城，カルロス・ニコトラなどの日本で活躍するブラジルの日系選手を中心に構成された。そして特筆すべきは，特別ゲストとしてサッカー元ブラジル代表のスーパースターであったリベリーノが日本選抜に加わっている。サッカーの王様といわれるペレがサッカーブラジル代表を退いた後，その後継者としてブラジル代表を率いた選手であり，世界的にその名声は広く知られていた選手のプレーが見られることになった。それまでリベリーノクラスの選手を日本で観る機会もなく，往年の 10%から 20%程度のパフォーマンスと自ら語っていたリベリーノではあったが，武道館と静岡での地元選抜とのサッカーの試合では，日系選手の日本選抜チーム「アミーゴス」の一員として参加した時のプレーに観客は沸いた。

1981 年（昭和 56 年）に FC バネスパ，1982 年（昭和 57 年）に FC パルメイラスの U18 チームを招いての国内各地での国際試合は評判を呼び，サロンフットボールの知名度は加速的に高まることとなったが，連盟が期待して取り組んだ日本武道館での試合は，前座に帝京高校対暁星高校という高校生としては日本でトップクラスの試合が組まれ，加えて名手リベリーノの出場にも拘らず，会員権の売り上げはさほど伸びず，観客は二千人に満たなかったため，興行的には大きな赤字となったが，試合そのものは白熱したゲーム展開が続き，リベリーノも往年の技術を披露するなど，日本選抜チームの得点にも絡むなどして観客を楽しませた。全国各地での試合もまた FC パルメイラスの強さが際立っていた。1982 年２月 16 日の尼崎市での試合では，前出のセルジオ越後，アデマール・P・マリーニョなどに加え，当時の日本サッカーリー

グで活躍していた松木安太郎，吉村大志郎に現地の林繁美（松下電機），松永英樹，辰田久美（共に大商大）のメンバーで臨むものの，大差で敗れている。他の地域も，日本選抜（アミーゴス）のメンバーに地元選手が加わるなどして対戦しているが，結果は同様であった。こうした1981年，1982年とブラジルサロンフットボールの名門チームを招いての国際試合は，試合結果はともかく，国内各地で多くの試合を催し，本物のサロンフットボールを見せることができたことに大きな意味があった。

今から41年前にこのような催しを行い得たのは，当時の関係者による大いなる志があったからであり，これらのことが我が国におけるフットサルの次なるステップとなる国際舞台への進出へと結びついていったからである。また，FCパルメイラス来日の際にジャヌアリオ・ダレシオ・ネトがチームの団長として帯同したことで，日本の実情を理解し，その後日本ミニサッカー連盟に助言を与えてくれている。ジャヌアリオはFCパルメイラスのフットサルの会長であり，更に，世界サロンフットボール連盟（FIFUSA）の会長でもあった。この人物の来日が，同年５月に開催される第１回サロンフットボール世界選手権への日本チームの招待へつながったのである。また，ジャヌアリオは，この後10年にわたるFIFAとFIFUSAにおける確執の中心的人物でもあった。

Ⅴ．日本代表の編成と国際大会への参加

5.1　FIFUSA第１回世界選手権大会への出場

FCパルメイラスの帰国後，大会への招待状が届いた。日本ミニサッカー連盟は，日本サッカー協会への代表チームの派遣申請を行うと同時に選手の選考にとりかかったが，日本協会からの返答は，役員の派遣は良いがチームは時期尚早との回答であった。そこで，日本ミニサッカー連盟は大学生を中心のチームでオブザーバー参加という方法によって，独自のチーム編成による派遣を試みることとなった。

集まったメンバーで事前に，旧国立西が丘競技場体育館で壮行試合まで行っている。この大会への参加が学生のみのチームであったのは，20日間にも及ぶ海外遠征に生業を休んで出かけられるのは，学生以外にはあり得なかったというのが実情である。

大会は1982年5月30日から6月10日まで，前年にバスケットボールの世界選手権を行った２万人収容の大規模アリーナのイブラプエラで開催された。参加国は10カ国。南米から地元ブラジル，ウルグアイ，パラグアイ，アルゼンチン，コロンビア，中米からコスタリカ，ヨーロッパからイタリア，オランダ，チェコスロバキア，そしてアジアからは日本のみが参加した。オブザーバーによる特別参加のつもりであった日本選抜は立派に出場国として扱われたことが語られている。

5.2 FIFAとFIFUSA

1985年10月に第２回サロンフットボール世界選手権大会の代表監督であった榮が岡野（当時JFA専務理事）からの呼び出しを受けている。第２回世界サロンフットボール選手権大会への出発を二週間後に控えた時であった。その際，FIFAから届いたという葉書大ほどの短い英文の書状を見せられ，そこには「スペインで行われるFIFUSA主催の大会はFIFAが認めた大会ではないため，「登録選手は出場することのないように」という内容が記載されていた。さらに「もし出場した場合は，FIFA主催の大会には出場が認められなくなる。」といった内容の文章となっていた。その際，榮は「この大会への参加はFIFAの国際大会への出場停止とする」とは読めないのではないかと反問したという。とにかく一通の通達文では何が起こっているのかが理解できないため，大会本部と連絡を取ることを申し伝え日本サッカー協会を出たその足で，榮は新宿のKDD本社へ向かい，通信に使われ始めていたテレックスを利用し，FIFUSAへ連絡を入れた。当

時電報をFAX にしたようなこの機材を所有していたのは，大手商社あるいは国際的なビジネスを行っていた企業に限られていた。FAX はこの年代ではまだ開発されておらず，この時 JFA には未だテレックスどころか，FIFA と直接電話でやりとりするような習慣も関わり方もなかったのである。

FIFUSA の大会事務局長であったセラーノからの返答は。「大会開催の準備は順調に進んでいて，地元スペインは元より，ブラジル，熟考の末に，チーム派遣を決定アルゼンチン，ウルグアイ，パラグアイの南米勢はもとより，コスタリカ，USA ，オーストラリア，オランダ，ポルトガル，チェコスロバキアなど，参加決定国はすべて出場の確認を得ている」というものであったが，榮は更に「FIFA との問題が解決していなければ日本は参加できない。」というメッセージを送った。すると，セラーノからはすぐに「FIFA との問題は解決したので出場するように」とのテレックスで回答が届いたため，榮は団長であり，当時の連盟副会長であった加藤に相談し，日本ミニサッカー連盟としての最終判断を仰いだ。連盟は，国際情勢を確認する意味からもチーム派遣を決定した。榮はFIFUSA の回答と，連盟の決定を持って再度 JFA に岡野を訪ねている。事前に大会本部から届いていた資料には，大会名誉会長にファン・カルロス国王が就いており，1992 年，バルセロナ・オリンピックでは公開競技になっているという事情も踏まえ，今回はチームを派遣したい旨を伝えた。それでも岡野は出場を「不可」とはしなかった。そこで，連盟は念のためこれらの経緯を選手たちに伝えて，参加の意思確認をしたところ，１名を除き全員参加するとの意向であった。

1982 年の第１回のフラジル大会の折には何の問題も起きていなかったが，三年後になぜこのような事態が起きたのか。そもそもFIFA はこの時点まで，室内のフットボールに関しての関心を持たず，研究，調査，検討すら試みてきていなかった。その間に各国で独自の室内フットボールのルールが生まれ，競技が進行することになっており，その中の最大組織が FIFUSA（国際サロンフットボール連盟）であったのである。

FIFUSA の第２回世界選手権大会を前に，FIFA はようやく事の重大さに気づいたというところであろうか。かくして日本ミニサッカー連盟は，初の組織公認である日本代表チームを派遣することになった。

5.3 初の日本代表選考と全日本選手権大会の開催

1985 年は日本のフットサルの国際化，また国内でのフットサルの盛り上がりが一気に花開いた年であった。まず，５月の連休には，日本ミニサッカー連盟の全日本選手権が初めて，静岡県沼津市立体育館で催され，第２回サロンフットボール世界選手権大会の選考会を兼ねた大会となった。更に，７月から８月にかけて，ブラジルの日系人スポーツ文化協会「ピラチニンガ」が派遣した日系人フットサルチームが来日し，全国を転戦したほか，代表候補選手の選考試合として実施された。

そして，７月から８月に日本代表選手を選出するため，1985 年 10 月 15 日，我が国初となる連盟認定となる室内サッカーの日本代表は編成され，成田空港からルフトハンザ航空によって，フランクフルト経由でスペイン・マドリードへと旅立つことになる。この時，日本のグループはブラジル，アルゼンチン，オランダであった。翌日マドリードの大会本部からの連絡があり，大会運営に関わる会議を行うので各国の代表者はマドリードに集合するようにということであったため，加藤団長の指示で榮が参加することとなった。マドリードでの会議には参加 12 カ国代表の他に，FIFUSA 会長のブラジル人，ジャヌアリオ・ダレシオ・ネト，スペイン会長でヨーロッパ支部長のアントニオ・アルベリカ，そして大会事務局長セラーノなどが参加している。

5.4 競技名「FUTSAL（フットサル）」の誕生

会議では，各国の状況紹介があり，特にこの競技の各国での呼称が披露された。日本，アメリカは「ミニサッカー」，スペインは「フットボールサラ」，ブラジル他中南米は「フットボール・デ・サロン」，イタリ

アは「カルチェット」または「チンクエ」などであった。大会名は「サロンフットボール」であったが，大会本部は，この競技の将来の発展，そして，国際的な組織の認知と確立のためにも名称の国際的な統一が不可欠であることを提唱した。

この時，FIFUSA が提案した名称が「FUTSAL（フットサル）」であった。スペイン語の「futbol sala」，ポルトガル語の「futbol de salao」の FUT と SAL からの合成語であった。提案は満場一致で承認され，もう一つの議案を含んだ議定書として，各国代表が署名することとなった。最後に榮に順番が回ると各国代表者が榮を取り囲み，皆が漢字で書けと促されたため，楷書で書き添えると一斉に拍手が起こったという。

この瞬間に，新しい国際的競技名「FUSAL（フットサル）」が決定したのである。この名称の誕生に日本人が関わっていたことを知る者は少ない。

さて会犠のもう一つの重要講題は，フットサルの国際的な地位の確立であり，即ち FIFA と FIFUSA との関係をどのように扱うかという問題であった。この時 FIFA との組織的な確執の問題は結局未解決のままであり，この両者による軋轢の原因の根本は，FIFUSA よりむしろ FIFA 側にあった。

1930 年，第１回 FIFA ワールドカップ・ウルグアイ大会の直後に，室内フットボールの産声がウルグアイに興って以降，その文化が隣国のブラジルに伝わり，YMCA の組織を通じてフットサルはパラグアイ，アルゼンチと徐々に南米大陸に広まっていっていったが，この一連の動勢に当初 FIFA は無関心であった。

競技の統一名称である「FUTSAL」は問題なく定まったが，もう一つの議題，FIFA との関係に入ると俄然議論は活発化し，白熱した。FIFUSA の大会直前に FIFA が下した大会参加への中止勧告（警告）に対し，参加各国からは，不当な干渉であるという激しい非難が上がっていた。FIFUSA の初代会長は FIFA のジョアン・アベランジェ会長であったことにも起因している可能性があるが，後にこれも中途半端な解決へと進むことになる。主張の中心は，そもそもフットサルはサッカーとは別競技であって，これには「FIFA が干渉するのは論外である」というものであった。卓球とテニスが別競技であるのと同様であるという意見も出されたという。これら FIFA の干渉に対する FIFUSA 側の反発・反論には十分な理由があった。その背景には，それまで室内サッカーに関して FIFA は，余りにも長い間無関心であり続けたこともあった。

1930 年，第一回サッカーワールドカップがウルグアイで開催された直後から，同国で室内フットボールの組織創設が企てられていた。中心的役割を果たしていたのが，世界のフットサルの動向に大きく関わっていた南米 YMCA のスポーツ責任者であったセリアーニであった。そして 1936 年，同氏の下にルールが制定され，初めての競技がウルグアイで行われた。やがて YMCA の組織を通じて，隣国パラグアイ，ブラジルから南米全土へ伝えられ，特にブラジルでボールが開発されると第二次世界大戦に直接関わることのなかった南米全体に市民スポーツとしてこの競技は広まっていった。

1961 年，国際サロンフットボール連盟（FIFUSA）設立。1970 年には世界 32 カ国が加盟。他方，ヨーロッパでも，1977 年には，ベルギーとオランダの各カテゴリーのチャンピオン戦，ベネルックス大会が開催され，以後毎年開催。さらに，1980 年にはパンアメリカンカップがメキシコで開催され，ブラジルが優勝した。そして 1982 年には第１回世界サロンフットボール選手権が既述の通り，ブラジルのサンパウロで開かれた。同年，第１回４カ国対抗フォーネーションズカップがオランダで開催され同国が優勝。1984 年，世界大学選手権大会がブラジルで開かれブラジルが優勝。同年パンアメリカンカップがサンパウロで開かれ，ブラジルが優勝した。さらに 1985 年には，インターナショナルチャンピオンクラブトーナメント開始された。そして，この年の第２回サロンフットボール世界選手権大会の開催に至ったわけである。

この大会の名誉総裁はファン・カルロス国王であった。しかも，1992 年開催が決定していたバルセロナオリンピックにフットサルは公開競技の指名を得ていたことなども，FIFA にとって大きな衝撃であり，もはや室内フットボールに無関心ではいられなくなったと考えられる。

しかし，この FIFA の勧告は逆に，FIFUSA の存在とサロンフットボールという競技を世界に知らしめることになったのは間違いない。FIFA は，この段階ではルールも持たず，大会も行ったことがなく，室内フットボールに対して，それを自らの努力で築き上げ，世界大会までに育て上げた組織に対し，中止勧告を行うことは，各国の関係者にとって理不尽は出来事であった。

ジャヌアリオ･ダレシオ・ネト会長の見解は，FIFA の不当な干渉に対し，FIFUSA は独立した組織としてフットサルの発展に臨むというものであった。そこで，会議終了後，榮は会長のジャヌアリオ会長に話し合いを求めたが，その話し合いの中で彼から驚くべき回答が返ってきたという。この時，榮はジャヌアリオ会長に，「FIFA と FIFUSA が，どのようなかたちにても互いの立場を認め合う合意がなされなければ，日本でのこの競技のこれ以上の発展は難しい。アジア型のスポーツ文化はトップダウンの傾向が極めて強いからだ。」と伝えた。するとジャヌアリオ会長は「タカオ，心配するな。FIFA 会長ジョアン・アベランジェと私は，実は幼馴染なのだ。この大会後も二人で会うことになっている。必ず問題は解決する。」と語ったのである。この後，本格的に FIFA がフットサルに着手し，FIFA の加盟国を中心にその活動を一気に広めていくこととなる。結局，この確執の主役であったジョアン・アベランジェ会長の在任中には，FUTSAL の統一は実現しなかった。幾度となく話し合いが行われたが，この問題は 2.5 でも記載したように，次の会長であるジョセフ・S・ブラッターに引き継がれることとなった。経緯の詳細は公表されていないが，当時の FIFUSA の役員の多くが FIFA のフットサル委員として転籍したことでこの問題は一気に解決へと進むこととなる。この第２回フットサル世界選手権大会に出場したことが，日本で初めてのフットサルの代表チームとなった。後に第３回大会までは日本ミニサッカー連盟が主導で代表チームが編成され，第４回大会へも同様に出場チームが編成されが，第４回大会への参加は，うまく組織移行できなかったメンバーによって，日本サロンフットボール協会（実質的には北海道サロンフットボール協会）が編成したチームでの参加であったため，公式な記録としては残されていない。

1985 年に，サロンフットボールというスポーツが当時 FIFA の書記長だったジョセフ・S・ブラッター（後の会長），そして会長であったジョアン・アベランジェによって，グローバルなサッカーファミリーに組み入れられることになるのと同時に日本サッカー協会内にも正式にフットサル委員会が設置され，同時に日本ミニサッカー連盟もその名を日本フットサル連盟と変更し，今日に至っている。また日本フットサル連盟の会長には，日本サッカー協会の会長が歴任されたことで，組織の安定化や適正化が図られている。

Ⅵ. 結語

本研究は，フットサル競技の歴史的変遷について詳細に調査し，我が国におけるフットサルの普及と発展の過程を明らかにし，ニュースポーツの発展経緯を探ることを目的としている。フットサルは，インドアサッカーとして始まり，国際的に普及していく中で，日本にも紹介されている。創生期から黎明期までの約 50 年間の歴史を辿りながら，我が国に紹介された経緯，組織化までの経緯，国際組織の確執，国内組織の混乱などの顛末をフットサル競技の普及過程と共に組織化の進展，さらに日本代表の編成から国際大会への参加について詳述した。

フットサルは，他のスポーツと同様に，創造的なアイデアと情熱的な個人や団体の努力によって我が国に生み出され，発展を遂げている。また我が国におけるフットサルの成長は，YMCA やサロンフットボール普及会，日本ミニサッカー連盟など，組織の設立や大会の開催，海外チームの招待などによって推進されてきている。特筆すべきは，海老澤と YMCA の存在なくしては，我が国のフットサルの発展は諸外国からも大きく遅れをとっていた可能性があるという点である。南米の YMCA による新しいスポーツの創造がなけれ

ば世界展開も進まず，我が国への紹介も進んでいない。そこに海老澤という人物の発想と熱意が我が国にフットサルをもたらすことにつながっている。また，その熱意に呼応するように札幌大学の柴田がその熱意と行動力でサロンフットボール（後にフットサル）というスポーツの定着を進めることとなった。

本論文のサブテーマでもある「ニュースポーツの発展経緯を探る」という点を組織論的に捉えれば，スポーツ組織の発展は，今日のスポーツ振興の推進役となる地域機能の充実化を基本とし，地域文化及びソーシャルキャピタルの形成という極めて重要な役割を果たすことにつながるため，一度発展し始めると地域団体の役割・機能の充実化を進める限り，その存在価値を失することはない。このような内発的発展を基本とした組織の充実化が，すなわち中央組織の発展やスポーツそのものの発展につながるという構図は，今日のスポーツにおける発展要件としても大きな教訓となるものであり，本質的なスポーツ組織論へと連結すると考えられる。しかし今日の地域組織においては，中央組織の従属組織としての性格が色濃く残されており，運営の自由度はさほど大きくはない。こうした点からもフットサルの創生期にみられた地域組織が先導するスポーツの発展は極めてイノベーティブなものであり，中央集権の中から生み出される活力のみでは，今日の反映はなかったのではないかと考えられる。つまり中央の組織化を重要し，そこが運営原資や組織形成に伴う財政的支援を実現できなければスポーツ団体の発展は見込めないという思想では，誰もが理想とする発展にはつながらないのかもしれない。また，本文中に数多く登場するセルジオ越後，ジョージ与那城，セイハン比嘉といった当時現役で活躍していた選手などが，プレーをみせるために足繁くイベントへ参加していることも注目される。実際のプレーの楽しみや競技の奥深さなどを知ってもらうには，こうした発展を支えた選手をはじめとする多くの「人」の関わりや尽力も大きく寄与していることも忘れてはならない。

フットサルの発展には，公益財団法人日本サッカー協会の全国に及ぶ組織的な力も普及には欠かせないものであるが，その根底にあるのは，フットサルを発見し，その発展可能性を理解し，熱意ある活動と実行力を伴った上で，地域という小規模の組織範囲における定着と安定化を確実に進め，次第に人的共鳴を生みながら拡大・展開させてきたことの有効性が示されている。また，地域の展開による市場の拡大と事業の充実化をはかりながら着実に参加者や登録者を積み上げる努力を続けてきたことが，今日のフットサルの発展や振興に大きく関与していることは実態が示している。加えて国際的な試合の開催や日本代表の編成，国際大会への参加などは，選手の育成のみならず，指導者の育成や組織の成熟へ強く貢献するという教訓を得ることとなった。現在，フットサルは我が国で広くプレーされ，全国的な大会やリーグ戦なども活発に開催されている。さらに，フットサルはスポーツビジネスの一環としても展開され，多くの民間施設や公共施設において活動が可能となっていることも他のニュースポーツにはみられない特徴である。

本研究は，フットサル研究の進行やスポーツ組織を含めた環境の整備・改善などに寄与することが期待されるほか，フットサルの創成期における顛末を知ることで，スポーツの普及・発展や組織の発展要素などの示唆を得ることができるものと考えられる。このほかにも，地域的な動きや関わってきた人材や全国への組織的拡大や代表編成などの社会学的アプローチといった様々な分野の要素が積み残されている。これらの要素は追って次の研究課題としていきたい。

最後に，本研究は歴史的に関わりをもってきた数多くの方々のご協力を得ることで実現に至った。フットサルに様々な形で貢献されたすべての方々に心より感謝の意を表するものである。

また，本論文の国内部分に関しては共同執筆者として，我が国におけるフットサルの創成期にご尽力された女子美術大学の榮隆男名誉教授（JFA 初代フットサル委員長）にご協力戴いた。加えて先生には本研究実施の機会を与えて戴いたほか，その遂行にあたって終始ご指導を戴いた。ここに深謝の意を表したい。

Ⅶ. 註

1） FIFA：世界のサッカー界を統括する競技団体である。サッカーのほかフットサル，ビーチサッカーなどの競技を統括する。本部はチューリヒ（スイス)。

2） YMCA：キリスト教青年会 Young Men's Christian Association の通称。キリスト教の精神に基づき，会員の全人格の向上と，奉仕の精神を基本とし，スポーツを通じて青少年の健全育成を目指し，数々のスポーツ種目を生み出し，スポーツの発展にも貢献してきている。また体育館を必ず整備した事も特徴的である。

3） FIFUSA：国際フットサル連盟(Federação Internacional de Futebol de Salão およびスペイン語:Federación Internacional de Fútbol de Salón)は，FIFUSA の頭字語。1971 年の設立から 1989 年の解散まで，世界中のフットサルの管理を公式に扱った国際連盟であった。

4） 独自のルール形成：FIFA がフットサル競技を統一させるまでは，各国で室内サッカーやミニサッカーのルールや名称は，それぞれ独自性を有して発展していった。

5）アイスホッケーの戦術：２分間での規則的な選手交代や全員交代などの特徴的な対応を指す。

6）柴田勗：1933 年 3 月 8 日生まれ・北海道出身・現札幌大学名誉教授・NPO 法人 SSS スポーツクラブ代表，フッチボール・デ・サロンを札幌大学サッカー部に取り入れ，２人のブラジル留学生とセルジオ越後の協力を得て，1973 年から全国普及に乗り出す。「サロンフットボール」の命名者。

7）原崎正：北海道学芸大学（現敦賀大学）の教授であった原崎は，東京高等師範（元東京教育大，現筑波大）の出身で，当時の北海道サッカーの技術指導の中心的存在であり，元北海道サッカー協会理事長。故人。

8）岡野俊一郎：(1931 年 8 月 28 日-2017 年 2 月 2 日）は，東京都出身の元サッカー選手・日本代表監督。第 9 代日本サッカー協会会長，東アジアサッカー連盟初代会長。元国際オリンピック委員会委員。故人。

Ⅷ. 参考・引用文献

・日本フットサル連盟オフィシャルハンドブック（2000-）

・榮　隆男：白夜書房　隔月刊行雑誌「フットサル・ナビ／フットサル見聞録」2007-2017

・榮　隆男：大修館書店「フットサル　魅力あふれる 21 世紀のスポーツ」pp397-pp403

・原田理人・宮原直之：岐阜協立大学論集（第 56 巻第１号）「我が国におけるフットサル普及の現状と課題」2022 年 7 月 pp31-pp51

・原田理人：綜合ユニコム　「レジャー産業資料／10 月号／成熟期を迎えたフットサル事業の現状と開発のポイント」2004

・原田理人：笹川スポーツ財団「スポーツ白書 2005／フットサル」2005

・原田理人：綜合ユニコム「レジャー産業資料／８月号／競合期を迎えたフットサル事業の現状と事業安定化のポイント」2007

・須田芳正：大修館書店「フットサル教本」2002 年 06 月

・須田芳正：慶應義塾大学体育研究所紀要 43（1）7－13「日本におけるフットサルの普及に関する研究」2004 年 01 月

・須田芳正：大修館書店「フットサル教本改訂版」2013 年 10 月